英国春秋

２０２３年　春号
ISSUE No. 42
創刊２５周年記念号
発行　英国日本人会

はじめに

わが苑(その)に　梅の花散る　久方(ひさかた)の　天(あま)より雪の　流れ来るかも　　大伴旅人

まだまだ寒さの残る我が庭の梅の花が散り始めました。楚々とした白い花びらは
まるで天から雪が流れ落ちてくるように次から次と後を絶ちません

とおおらかに歌い上げたこの作者は白梅の花が好きだったようですね。我が国の元号、令和の典拠になった彼の別の歌でもやはり梅の花を詠んでいますが、それにはこの花を、雪ではなく美人のおしろいの白さに例えています。この他にも梅の歌がありますがそれ以上に酒宴について詠ったのが多く、花よりお酒の方が好きだったのかと思わせてしまいます。私はイギリスでは白梅にお目にかかったことはありませんが、先日、紅梅に出会いました。やっと４カ月前にオープンしたバタシー・パークの入り口のところでした。まだ頼り気のない若木でしたが、それでも７～８個の花をつけていました。旅人なら紅梅にはどんな形容をつけて詠むのかと、ふと思ってしまいました。もしかしたら美人の頬紅の・・・でしょうか。

クリスマスが終わり、十二夜も過ぎると道路の端に、いらなくなったクリスマスツリー、モミの木が投げ捨てられてしまいます。今年は回収が遅れているようで、２～３メートルもある立派なのが、わが通りだけでも７本も転がされていました。また過日トラックに山のように積まれた売れ残りの樅の木が、ガーデンセンターから出てい行くのに出会いました。この地区だけでもこれだけと思えば、それではロンドン中では何百本、イギリス中では、フランスやドイツ中ではと考えていくと、その処分されるであろう数字を想像するだけで恐ろしくなります。我々は CO2 排出だけでなく、若木を切り倒し環境破壊に一役買っているのかと思えば、暗澹たる気持にさされてしまいました。クリスマスには私はもっぱら、人工のモミの木を愛用しています。この間、ガーデンセンターで杉の苗木を購入しましたので、もう少し暖かくなったら庭に植え替えようと思っています。大木になるまで待つことは出来ないでしょうが、いつかは大きく育ち、沢山のオゾンを出してくれることでしょう。

今年で『英国春秋』は創刊２５周年を迎えます。ライバル社（？）の『文芸春秋』は昨年で１００周年とのことでした。先方から「比べられる相手ではないでしょ！」と言われれば、ちょっとシュンとしてしまいますが、同じ“春秋”を冠する雑誌だから、少々の比較は我慢してください。しかし創刊から４分の１世紀が過ぎ去って行ったかと思えば、あれやこれやと長かったようでもあり、また短かかったようでもありで時の流れに驚くとともに、その間の諸事が思い出され感一入です。何と言っても文集は投稿者なしには存在し得ませんので、毎号エッセイをお送りいただいた皆様に心から感謝するとともに、今後一人でも多くの会員の皆様からのエッセイを期待したいと思っています。ちょっと気がかりなのは、最近の購読者数減少です。質の向上には極力努力して行きたいと思いますので、ご支援をよろしくお願いいたします。

ウクライナとロシアの開戦日、昨年の２月２４日からあっという間に一年が過ぎ去って行きました。爆破された家屋やビルを見て最初は驚きましたが、以来、その何十倍もの家屋やビル、いやその上に学校、病院、駅、発電所の爆破がいまだに続いています。エイブラムス、レオパルト、チャレンジャーとまるで強国の戦車の見本市のように貸与が約束されたそうですが、それによる戦況激化、一般人の被害が増々広がって行くことでしょう。しかし、今まで戦場になっていなかったロシアの人々への“情報提供”という支援も是非必要ではないのでしょうか。ウクライナの破壊された家々や街々、悲嘆にくれる人々の姿、泣き叫ぶ子供達の姿など、その生々しい映像を赤の広場や宮殿広場で流し続けることは出来ないでしょうか。シリコンバレーで巨万の富を築いた各社が共に最新の技術を駆使して、ロシアの厳しい統制の目を潜って、ロシア国民に真実の提供を行うと言うのは無意味でしょうか。これで戦争の勝敗を云々するというよりは、１人でも多くのロシア国民に自国のリーダーがもたらしたこの戦争の無責任さを知ってもらうと言うのは、あまりにもナイーヴな考えかも知れませんが。(24/02/2023)

＊ ＊ ＊　もくじ　＊ ＊ ＊

はじめに			２
もくじ			３
佛さまの教えってどんなもの？		石井健心	４～　５
英国春秋歌壇	皆に幸あれ	バロー典子	６
雪の日の思い出		須永静江	７～　９
生と死について		＊　ネット文化サロン	１０～１４
憧れの音楽家		川瀬和広	１５～１６
森の妖精・氷河期からの生き残り		ビドル惠	１６～１９
ベッリーニのオペラ		原田孝雄	２０～２１
Haruki Murakami をめぐる冒険		中沢賢治	２２～２５
遺された一冊の本		クリストファーひな子	２５～２６
英国春秋俳壇	寒オリオン	エリオットつや子	２７
心の和らぎ		小川のり子	２８～３０
古典籍スクール（その３）		ブランド啓子	３１～３４
開かれた男、　若者よ、君、死に給うなかれ		石山望	３５～３６
こんな女に誰がした		石山望	３６
地球の歴史を知るには		須永静江	３７～３９
本の声が聞こえますか		園部健治	４０～４１
恋はやさしい野辺の花よ～そして今		正木裕子	４１～４３

*ネット文化サロン寄稿者
加藤節雄・飯塚忠治・小川のり子

今号の特別寄稿者

石井健心氏	三輪精舎副主管
川瀬和広氏	在英国日本国大使館総括公使兼総領事
園部健治氏	在英国日本国大使館参事官兼領事
中沢賢治氏	元在ロンドン国際機関職員
原田孝雄氏	元在ロンドン金融会社勤務
正木裕子氏	在ブラッセル声楽家

アイウエオ順

佛さまの教えってどんなもの？

石井建心

お葬式やご法事を通して関わることが多くなったこの頃、佛教と聞くと、自分の日常生活とはかけ離れ、あまり親しみの無いものと感じられる方も多いと思います。そこでここでは、佛教がいかに日常の生活に基づいたものであるかを少しでもお伝えできればと思います。

【佛教の歴史と建国の基盤】

佛教は紀元前五世紀にインド北部でお釈迦様によって説かれた教えです。それから 1000 年後の 538 年、中国、韓国を経て日本に伝わってきました。以来、日本はその教えを大切に建国されました。その基となったのは、聖徳太子の一七条憲法です。その第一条は「和を以って貴しと為す」、そして第二条は「篤く三宝を敬へ」という言葉から始まり、全文は日本書紀に記されています。
それらは、現代日本語ではどのような意味なのでしょうか？
第一条は「和を尊重し、争わないことを大切にしなさい。人は皆、党派を作るし、物事に熟達者は少ない。そのため君主や父親に従わなかったり、近隣の人々と考えが相違したりもする。しかし、上の者は和やかに、下の者も睦まじく、物事を議論して内容を整えていけば、自然と物事の道理に適うようになるし、何事も成し遂げられるようになる。」
第二条は「佛教の三宝（佛・法・僧）を篤く敬いましょう。佛法は四生（生きとし生きるもの）が最終的に帰する処であり、全ての国にとっての大切な教えである。いつの時代の誰であろうと佛法を尊べないような者はいない。世の中、極悪人は少なく、大抵はよく教えることによって導くことができるが、三宝に依らなければ、曲がった心を直すことは難しい。
という意味になります。この第二条に出てくる三宝（さんぼう）とは、「佛さま」、「法（佛さまの教え）」、「僧（僧伽：法を実践する集団）」という意味です。
日本人として、和を重んずる心を大切にしていきたいと思います

【佛さまの願い】

私たち日本人の多くは、「佛さま」と耳にすると、鎌倉や奈良の大佛、実家に代々伝わる佛壇のお佛像を思い出したり、すでに亡くなられた祖父母や両親、兄弟など、近親者を思ったりします。その佛さまやご先祖の私たちに対する純粋な願いが、佛教を説かれたお釈迦さまの教えと同じです。親（祖父母）は子供の幸せを願う。これは良き親に恵まれた方なら皆さん同意されることだと思います。では、幸せとは何でしょうか？現代では、学歴や就職先、収入の高低によって幸せか否か判断しがちです。しかし、幸せというものには絶対的な基準はありません。生涯かけても使いきれない程の資産を持っていても、犯罪を犯してまでお金を増やそうとする人は沢山います。親から見れば、非常に悲しく残念なことです。一方、たとえ一般的な生活、または毎日ギリギリの生活を強いられている人でも、「私は幸せ」と言える人も沢山います。日々感謝しながら生きている我が子を見て、「一人前になったなぁ」と親はさぞ安心することでしょう。
では、ここに現れる違いは何か？それは感謝の有無です。たとえどんなに小さなことにでも感謝を持てる人は幸せを感じますが、受け取る物や他人の好意、お支えを当たり前と思う人は感謝のない人生を送り、日々不満を口にしてしまいます。何でも「してもらって当たり前」と思ってしまうのは、私たち人間がいつも自己中心に物事を見て考え、生活しているからです。自己中心的な考えのまま生活すると、私たちはつい「自分が所有していない物」を数えてしまい、不平不満が増長し、怒りへと変わっていきます。貪りや怒りは私たち人間が煩悩を持っている証拠であり、苦しみの原因です。そんな私たちに、佛さまは縁起という教えを説かれ、煩悩から離れることを教えて下さいました。縁起とは「一切のものは全て依りあって存在している」という教えです。生きとし生けるもの、またたとえ石のような無機物であっても互いに支えられて存在しているのです。ご恩を感じて生きなさいと、生かされている真実に気づき、感謝を

持てるポジティブな目線を持つように教えて下さっています。
「無いものを数えるのではなく、頂いたものを数えてみましょう」、これはある浄土真宗寺院のご住職が仰った一言で、私にとっては佛さまの願いを端的に表現されていて、いつも思い出すお言葉です。

【自己中心な目線が変わる】

先に述べた、「ご恩を感じて生きる」、「生かされている真実に気づく」、「感謝を持てるポジティブな目線を持つ」ということについて、私自身が体験したことをご紹介させて頂きます。

ある年の秋、私が日本に一時帰国していた時のことです。三輪精舎の本坊である福岡県の正行寺に戻り、毎朝毎晩、境内の桜が山門前の道路に落とした沢山の落葉をお掃除していました。ある日の夕方、私が掃き掃除をしていると、80 歳くらいの通り掛かりのご婦人が、「いつもご苦労様」と声をかけてきたのです。私は突然話しかけられたことにちょっと驚きつつ、「誰かな？」と相手の顔を伺いながら、会釈をしました。でもその方は初めて会う全く知らない人でした。そしてその方は顔を上げた私に、「あなたは幸せね」と言われたのです。「えっ？」と思った気持ちを私の表情から察してか、そのご婦人は「だってこんなに綺麗な紅葉を毎日お掃除できるんですもの」と、私の中には全くない考え方が詰まった一言を仰いました。このご婦人の一言は、何も見えていない私の目を開き、鈍感な心を揺さぶり起こすような本当に衝撃的なものでした。この佛様のお言葉とも取れるようなご婦人の一言によって、私は「あぁ、またこんなに落ちている。落ちるなら一度に落ちたらいいのに」と、桜に対し不満タラタラで掃除していた自分に気付かされました。そして、そんな気持ちで掃除をしても何も意味がないこと、何事も本来の目的と感謝をもって行うことに、初めて本当の意味が出てくるということを教えて頂いた気がします。後日、このことを正行寺のご住職にお話しした際、私自身が照らされるという体験をしたことを本当に喜んでくださり、「そのご婦人は佛様ですね」と仰ってくださいました。今でもこのご婦人がどこの誰だかわからないのですが、この僅か 5 分足らずの出会いは、今も私の中で生きており、お掃除をする度に思い出す私の宝物となっています。

毎年、春と秋、そしてお盆には日本人会の方々がヘンドン墓地に集まって、我々のご先祖が眠る日本人墓地のお掃除をされます。みなさんお忙しい中に、それぞれの時間を割いて、何かを求めるわけでもなく、ただ一心に先人のご恩、それぞれのご先祖のご恩を噛み締めながら働かれるお姿に、清浄な美しさを感じます。そのような日本人会の輪の中に入れて頂いておりますこと、心から感謝申し上げます。

合掌

英国春秋歌壇

バロー典子

皆 に 幸 あ れ

木のこぶは　木が苦労した　時のものと
　　聞きてし後の　こぶの愛しき

朝霧の　時かけ上がる　この国の
　　人は静かに　列につらなる

訪英の　父母と写しし　ロンドンの
　　かの桜樹は　今も繋れり

花々は　みなそれぞれに　全きて
　　今ある場所に　凛と咲きおり

様々な　色の落ち葉を　拾いつつ
　　思うは人も　同じ人なし

丘陵の　２匹の子馬　照らし出し
　　燃える夕日が　沈みてゆきぬ

冬の日に　稀有に麗し　白樺の
　　幹の白さが　今も目にあり

雪降りて　真白き庭に　くれないの
　　もみじの色が　花とも見えし

辛夷樹の　葉もなき枝の　先端の
　　つぼみふくらむ　春待つ心

流れゆく　時に区切りを　付けて呼ぶ
　　”新しき年”　皆に幸あれ！

雪の日の思い出

須永　静江

2022 年 12 月 12 日雪明かりに目覚めた。夜中に大雪が降ったのだ。
上の写真 ： RETIREMENT FLAT － WESTON COURT の裏庭。日中も気温が上がらず、6 日間の雪ごもりとなった。

その１－ （2003 年１月？）

子供たちを帰宅させた後の学校は静かであった。その日は職員会議があり、休憩時間に会議室から職員室に戻った時、外では音も無く粉雪が降っているのが見えた。余り気にする事もなく、会議室に戻り、会議は続行した。

6 時前に会議は終わった。急いで帰り支度をし戸外に出た。サラサラ雪は、知らぬ間に舗道・道路に 20 センチ以上積もっていた。舗道沿いに停まっている車はすっぽり雪を被り、路上で動いている車はまばらであった。EALING COMMON の駅に歩いてたどり着き、時刻版を見てビックリした。電車は全面的にストップしていた！駅の構内は変に薄暗く、既に、ほとんど人影がなかった。「どうしよう？」「バスしか無い！」

HARROW 方面に行くバス停まで歩いた。既にラッシュアワーで、多くの乗客が押し寄せており、私は不安に襲われた。「家に帰れるだろうか？」多くのバスが満杯で、バス停の乗客は構わず通過して行った。「一つ二つ逆方向のバス停まで歩いたら、乗れるチャンスは大きいだろうか？」と、思った。運良く、押し競饅頭の状態のバスに乗り込むことが出来た。一(ひと)安心。

所が、このバスは、ALPERTON の車庫に行く途中だったらしく、車庫近く、一つ手前のバス停で、全ての乗客を降ろした(＝捨てたのだ！)。そこで、次に来る、HARROW 方面行きのバスを待ったが、どのバスも通過して行ってしまった。(後で考えると、全てが、車庫入りだったのだ！)

一時間近くも待っただろうか？バス停で待つ乗客の数は 10 人くらいまでに減っていた。見渡すと、大きなホテルがあり、いくつかパブがある。しかし、この時、私には、どちらをも TRY する勇気が湧かなかった。「学校近くに住む同僚に電話をして、一泊させてもらおうか？」とも、思った。

遂に、ぼそぼそと、「今晩はもうバスは走らない。」と言う言葉が広がり、全ての乗客が散り散りに動き出した。私も、歩き出した。途中までにせよ、一緒に帰れる人が一人いて心強かった。

私はこの時まで、家と学校の間をバスと電車で十数年往復していたが、夏でも、昼でも、「歩いて学校から家に帰る、」と言う考えは思いも浮かばなかった。舗道の雪は25センチくらいの高さ、多少踏み固められたところもあったが、ほとんどが積もったまま表面が固まっていた。一歩ずつザクザクと進む。時には、足を雪に取られて滑る事もあった。危険を感じたのは、舗道から道路を渡って次の舗道に移るカーブの所であった。既に、車のタイヤの跡が凍ってパリパリの坂道を、たまに、車が横滑りしながら登って来たりするのであった。もう、夜の9時を過ぎていたであろう。皮肉にも、この頃になると、白い雪が回りを埋め尽くす中、空は、晴れて満天の星が輝き、冷たい風が頬に当たった。街明かりが、舗道の裸木を黒く揺らしていた。私は、連れの、労働者らしき人と別れて一人。一心に我が家へ向かって歩いていた。一度だけ、道ゆく人に道を尋ねた。教えられた通り少し進んで、それは、間違いであると思った。「このような非常時に嘘をつく人が居るとは！」「禍あれ！」と、呪った。（しかし、後になって考えると、その人は、それが正しいと思って教えたかも知れないから、故意に嘘をついたとは言い切れない訳である、が。）もう、その時は、自分の最寄りの駅から三つ目くらいの駅の辺りまで来ていたので、私にも、大体のけんとうが付いた。

最寄りの駅から一つ目の駅を越すと、良く知ったバス通りに出た。何となく心に余裕が出来て、最後の力が湧いて来た。一歩一歩と我が家に近づくに連れ、近年亡くなった父の顔が星空に浮かんだ。「見守ってくれて有難う。」と、私は感謝した。「ずーっと見守っていて下さい！」

家に着くと、緊張がほぐれ、一度にワット涙が溢れ、、、泣き出した。「無事に家に辿り着けたのだ！」

お風呂に入って温まり、そのまま寝てしまった。

翌朝は、頭がガンガン痛くて勤めに行けるような状態では無かった。

すぐに、『HARROW COUNCIL も EALING COUNCIL も、道路に塩を撒く対策が遅れたことで市民から非難を浴びていた』。しかし、政治家かジャーナリストが、‘ WRONG (TYPE OF) SNOW, WRONG PLACE.’ とか言い出して、非難の声は次第に消えた。それは、責任逃れをするのに都合の良いフレイズのように私には思えた。

その２ - SCOTT WELLS（？）さん

家を持っていると、何か事が起こるたびに、全て、持ち主の責任になる。雨漏りが少しして屋根を葺き替えるとか、窓がきちんと閉まらないので新しい窓に取り換えるとか、DAMP COURSE をやり直すとか、大工仕事やペンキ屋の仕事などは、どちらかと言うと急を要さない。しかし、それが無いと一日たりとも生活出来ない物、例えば、電気・ガス・水のような緊急を要する物の対処は別である。

1987年、勤め先の学校が WEST ACTON に移転したため、私も、一時間以内で通える所に家を探し、METRO-LANDと呼ばれるロンドンとバッキンガムシャーの中間地帯に、1930年代に建てられた家を買った。戦前に作られた家で、比較的広い間取りであったが、新しい電気配線、DAMP COURSE、二重窓、ガス・セントラル・ヒーティングなどの取り付けが必要であった。

2005年に退職と共に、家を全面的に改装した。居間と大きな BEDROOM を除いて、家中を板張りの床にした。カーペットの床より板床の方が、埃などが綺麗に拭き取れて清潔が保たれると思ったからである。この数年前にデザイナーの作った台所も、壁や床にイタリア製のタイルを貼って、模様替えをした。やり始めるとやり甲斐のある仕事、と言う感じがして楽しかった。冬になると必ずOVERFLOW になって問題を起こしていた屋根裏の水槽(WATER TANK)も取り除いた。全ての水がMAIN PIPE から直接家に入るようになったので、浴室もトイレも全面的に作り替える必要があった。部屋のサイズに合わせて、ドイツ製の小さ目な湯舟を注文したり、トイレも手洗いも全て計算して決めなければならなかった。私は、プラスチック製の肌触りが好きではなかったので、スチールにエナメルを塗った湯舟と、陶器製のトイレや手洗いにした。床や壁のタイルの大きさ、色、飾りタイルの配置など、タイル専門店を何軒も

歩き回って決めた。車を運転しない私は、文字通り電車、バス、そして徒歩で、目ぼしい店を歩き回った。今思うと、良くそのような時間とエネルギーがあったものだと、自分ごとではなかったように思う。今はもう、その様なことに時間を費やすには余生が余りに短すぎて、もったいなくて出来ない。

私は、2018 年までこの家に住んで、色々な仕事士と関わったが、一番思い出に残るのは、SCOTT さんである。何がきっかけでスコットさんを頼むようになったのか、記憶の糸が辿れないが、考えてみると、それまで世話になった様々な職種の人たちは、多かれ少なかれ、「土地 = ‘LOCAL’の人」であった。屋根屋さん、大工さん、ペンキ屋さん、タイル張り屋さんなど、皆、私の住む HARROW 地区の人か、隣接区に住む人達で、費用も仕事内容も、安心して任せられる人達であった。後で分かったのであるが、スコットさんは、小規模な建築会社に勤めていて、2008 年のリーマンショックの影響で、会社が倒産に追い込まれた時、簡単に解雇されたと言う事であった。簡単に、と言うのは、ある朝、スコットさんの所に、「今日は、仕事に来ないように。」と言う電話があって、そのまま解雇されたと言うのであった。「自分でもよく分からないんです。他の仲間も同じなんです。」と、言うことであった。「こんな事、人生で、初めてですよ。」と、私より一世代も若いスコットさんが言うのを聞いて、私はとても気の毒になった。

ある年、大雪が降り、ボイラーから余分のお湯を屋外の排水溝に導く水道管が凍ってしまった。お湯をかけても、更にお湯が凍り付くほど、まだ外は北風が吹いていて寒かった。電話で連絡すると、スコットさんは雪の中を歩いて来て、プラスチック製？のジャケットみたいな物を持って来て被せてくれた。人家の建て込んだ狭い道は、雪が積もったままで車は走らせられない状態であった。「雪の中を歩いてでも直しに来てくれる人！」と、私はとても感激した。数週間後に、この水道管は屋内の台所の水道管近くに配管されなおし、二度と凍ることはなくなった。

スコットさんの家は、代々、PLUMBER なのだそうだ。お父さんも、お爺さんも、そして、スコットさんのお兄さんも、一家そろって PLUMBER なのだそうだ。ある時、勉強部屋のセントラル・ヒーティングの一部から水が吹き出して来た。電話をしたら、「今日は、遠方に仕事で出ているから、夕方遅くまで家に戻れない。今、父に連絡をしたら、行ってくれると言っているから、しばらく待っていて下さい。」と言うことであった。言葉通り、スコットさんのお父さんが午後 3 時頃来て、直してくれた。

やがて、スコットさん一家も　お姉さん一家が居る　STEVENAGE と言う所に引っ越すことになった。私は、「これから先、PLUMBING の仕事は誰に頼めば良いのか？」不安になった。水がなかったら、台所も、トイレも風呂場も機能を果たさなくなる。私たちの生活は、水無しでは、一日たりとも成り立たないのである。

今なら、WHICH？の MAGAZINE を見て、評価の高い仕事士を頼むことも考えられそうだが、当時はそのような雑誌の存在すら知らなかった。家を持つには、「頼れる仕事士が身近に居る」と言う条件が必須なのである。

2015 年、弟が逝去した事がきっかけで、私は家を売って、RETIREMENT　FLAT に移り住むことに決めた。今では、嵐が来ても屋根瓦が飛んだり、外からの浸水などを心配する必要は無くなった。それは、MANAGER の仕事であるから。それでも、FLAT 内の水道や電気については、FLAT の持ち主の責任であるので、私は、保険に加入する事で責任感を軽くし、現在に至っている。

生と死について

ネット文化サロン

昨日話の出たネット文化サロン用のテーマ「生と死」ですが、次の要領で進めたいと思います。先ずＴさんが死ぬ思いをした体験を通して、人間にとって「生」と「死」とは何なのかという自分なりの考察を披歴し、それを受けて私が自分の経験を述べて考察を広げていき、Ｎさんが文学的、美術的観点から生と死について述べるというのはどうでしょうか。

剣が峰を越えて
飯塚忠治のメールより

その瞬間は、ある日、ある夜、ある時間、突然にやって来た。

23:20 Monday 21st Nov.
９９９Live or Die Calling sounds lasted for only a few seconds.
999 operator： 「What service do you require？」

Taro ： 「Ambulance please」

(Silence for a second or two.)

Operator: 「Can you tell me what has happened?」

Taro:「Foods just eaten is stuck in my throat and I feel difficult to breath! My breathing capacity is 50% of what it is normal」

Ambulance operator: 「Can you tell me your name please？」

Taro：「My name is Taro Osaka. Can you send me an ambulance quicky as I have breathing difficulties!」

Ambulance operator ：「Can you tell me your address please？」

Taro: 「My address is 3 Park Road, Edgware NW 」

Operator:「 And your DOB please」

Taro ： 「My DOB is 15th April 1949」

Operator ：「Can you tell me your address once more as I need to make sure where exactly you are now？」

Taro: 「My address is 3 Park Road, Edgware NW3 7XX. Please hurry I may stop breathing!」

Operator: 「What did you eat?」

Taro: (Too many questions I thought in my mind at this stage)
「I had some chestnuts, but a relatively large piece of a chestnut that I swallowed

accidently. Can you please send me an ambulance quicky I am feeling extremely anxious about this situation as I have breathing difficulties」
(I had a short of breath which could be heard by the operator.)

Operator :「I understand,an ambulance is on its way to your place」
Taro :「Please hurry I may stop beathing!!”
How long will it take to get here?」

Operator : 「Do not worry an ambulance is on its way」
(What came to my mind was that there were many cases when ambulance services were requested but there were many cases which took so much time, sometimes one hour so to arrive where they were required to be.) My hope of survival went so low. I may not stay alive for such a long time.)

Operator :「 We keep our line connected until the ambulance arrives at your place. Do not try to speak to me as you have breathing difficulties but try to cough up」

Taro : (Anxiety level surged sky high. I thought I am going to die of choking but tried to keep that thoughts off my mind.)

About 10-15 minutes went past.

Door bell rang, two ambulance men and a woman standing at the entrance door and they rushed themselves into my flat and made me to sit on the sofa.
Quickly started assessing what situation I was on.
ECG, blood pressure and stethoscope and kept talking to me.
They must have made their assessment of my condition and that the assessment was that there was no more urgency of taking me to A&E required.
They stayed in my flat for one hour or so by that time my situation became so much improved.
Relief!!!

今回は運よく浮世とあの世を別ける剣が峰の浮世側に滑り落ちることができたが、これはラッキーとしか言えないとつくづく思った。生きているそのこと自体、当たり前と思っていたが今後は違った見方が出来るようになったように思う。

「生」と「死」の境目

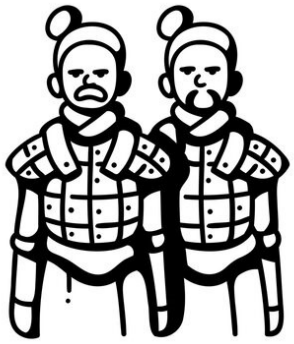
加藤節雄のメールより

我々の仲間の渡邊道英さんが逝きました。享年81歳でした。最近体調を崩し入退院を繰り返していましたが、11月13日に遂に還らぬ人となりました。ネット文化一同心よりご冥福をお祈りいたします。

最近のネット文化サロンでは「無限」と「有限」、「戦争」と「平和」といったような対極に存在する言葉に関して、我々の経験、体験、知識、知恵といったようなものを総まとめし、自分なりの意見をまとめて発表するという機会を作っています。今回のテーマは「生」と「死」です。
この命題に至ったのは、渡邊さんの死というだけでなく、飯塚さんの「ゆで栗事件」です。すでに飯塚さんのメールにありますように、ゆでた栗を喉に詰まらせ、呼吸が出来なくなり、死ぬかと思ったそうです。特に独り暮らしの人にはとても怖い話です。苦しい呼吸の中から救急車を呼んだのはさぞ大変だっ

たと思われます。
今回は運よく剣が峰からこの世の方へ滑り落ちたとありますが、毎年日本ではお餅を喉に詰まらせ、あの世の方へ滑り落ちてしまう老人がたくさんいることを思えば、確かに運が良かったと言えるでしょう。或いは、剣が峰の頂上にいるときに、神様が飯塚さんは普段の行いが良いので、この世の方へ送り込んだということかもしれません。ご無事で何よりでした。

ここで私も剣が峰に立たされた体験を言わざるを得ません。すでに１年以上前になりますが、地下鉄ウォータールー駅の長いエスカレーターで転倒、10段ほど転げ落ち頭を打って意識不明になり、救急車で近くのセント・トーマス病院に運び込まれた経験があります。意識はすぐに戻りましたが、自分では転んだ瞬間のことは覚えておらず、確か重い荷物をエスタレーターの床に置いた時に、片方の肩で担いでいたリックサックが急に前に回り、それに引っ張られて転んだように思います。
私はあの時、そのままあの世に行ってしまっても不思議ではなかったのですが、私も運良く(私の場合には「悪運強く」かも知れませんが)浮世に戻ることができました。良く死ぬ思いをした人が生き延びた際に、「助かった命です。これからは他人のために捧げます。」と言うの聞くが、私の場合にはそんな深刻な心境になれず、「死」というのはいとも簡単に訪れるものなのかという印象を強くしたに過ぎませんでした。
人間は遅かれ早かれ必ず死にます。その死には様々な形があります。天命を全うして逝く人、病気や事故で亡くなる人、独り寂しく死んでいく人、家族に囲まれて大往生する人、戦争の犠牲になる人、恨みを買って殺される人、犯罪を犯して死刑になる人、また、自ら命を絶つ人等々、それぞれの人間の「生きざま」が違うように、「死に方」にもいろいろあります。しかしながら自殺以外は自分で死に方を選ぶことは出来ないというのも事実です。
神代の昔から人間は死を恐れていました。自分がこの世から消えてしまうというのは確かに恐怖です。その恐怖を和らげてくれるために宗教がありました。多くの宗教が死後の世界を説いています。天国と地獄があり、生前に徳を施せば、死後に世界において天国に召されるというのは一般的な宗教の教えです。
為政者は自分の権力を死後にも残すため、エジプトに見られるような壮大なピラミッドや神殿を作りました。古代には王族が死ぬと一族郎党が皆死を共にした様ですが、あまりにも酷なので、それに代わるものとして、埴輪が使われるようになったと言われています。中国でもあの有名な兵馬俑（へいばよう＝Terracotta Army）は秦始皇帝の墳墓を守るため造られたとされています。
日本でも古代の天皇の墓地として古墳が知られています。



科学が発達した現在、死後の世界を信じている人は少ないと思われますが、それでも人間の死は厳粛であり、悲しいことです。また、死というものが周囲の人に与える影響も少なくありません。ある人の死によっては家族が路頭に迷ったり、ものごとが先に進まなくなったりもします。ただ単に惜しまれて逝く人もいるでしょう。
　自分はどういう死に方をしたいか、と考えたことのある人はたくさんいるでしょう。でも齢とともにそんな考え方は無駄ではないかと思うようになりました。いつ病気になるか分からないし、明日交通事故に遭遇するかも知れません。若いころはこれもやりたい、あれも挑戦したいと考えたものですが、あと何年生きるかどうか分からないという歳になると、やり残したものを早く片付けなければならない、あれはどうしようか、これは捨てなければ、といったような焦った気持ちで人生の残務整理に追われてしまいます。そしてほとんど確かなのは、結局やり残したものを整理せずに終わってしまうのではないかということです。
　エスカレーター転落事故以来、人間の死はいつ来るか分からないという感を強くしました。かと言って、ただ「死」をじっと待っている生活には疑問を感じます。長い人生ではいつも自分の好きなことばかりをやってきたわけではありませし、我慢を強いられてもきました。元気で「生」あるうちは、生きてい

ることを大いに楽しみたいと思っています。少なくとも私にとってこれが老後の贅沢と言えるかも知れません。

生と死、そして死と愛

小川のり子のメールより

暫くご無沙汰しておりましたが、皆様も新しい気持ちで新年を迎えられたことと拝察しております。
昨年末一時帰国中、右足首骨折以来、メールをいただきながら、何となく今回の命題「生と死」から遠ざかっていました。とは言え、寒い中けなげにも咲き出した寒桜を目前にして、心機一転、何か書き始めてみようかとの思いが湧き起こってきました。

過去のタイトル、「美」、「無限」、「戦争と平和」については自分の知識や考えを、比較的自由に語ることが出来ました。が、今回の「生と死」については、自分の思考を越えたどこか別世界のもの、魂とか此岸・彼岸も含めて語らねば・・・なんて考えると、何から書き始めて良いのかと途方に暮れてしまいました。
奇しくもメンバーの３人とも、大袈裟に言えば、生死を問う事故に遭ってしまい、またもう一人のメンバーは病気でこの世を去ってしまいました。これを一つの節目として、“今後どう生きて行きたいか”を主に考えながら、このタイトルに取り組んでみようと思っています。

考えてみれば、「死」は「生」の対極にあるのではなく、生のうちに潜んでいる、生きていることは同時に死を育みながらであると思えば、少しは考えが纏まってきそうです。
実際、人間は絶えず死と向き合って生きて行くことなんて出来そうもありません。何か大病を患ったり事故に遭って、一瞬、死を意識することはあっても、普段はそれを忘れさせてくれています。また加齢とともに友人・知人の死に直面したりすると、次はわが身かと鬱々とした気持ちになります。が、これも老人性鬱、生きているうちの一環で、他の仲間も同じかと思えば少しは気が楽になるようです。あれもこれもと欲張らずにそのまま生きて行けば、少なくとも人生は全う出来そうな気がします。

とまるで悟りを得た人間のように書いてしまいましたが、この“あるがまま、欲張らず”というものが曲者です。人間は“煩悩”という虫と共存しながら（コロナ虫もしかりですが）生きて行かねばなりません。やっぱりもう少しお金が欲しいとか、他人から感謝されたいとか、夫や妻からもっと愛されたいとか、美味しいものを食べたいとか際限がありません。また色々の悩みや、妬みや怒りも湧き起こってきます。しかしそれらを自分だけでは抑制・解決出来ないと思えば、宗教に耳を傾けるとか、誰かに悩みを聞いてもらうとか、何か自分の趣味を見出す、などで自分自身の気持ちを和ませることは出来そうです。それに加え、一般的には加齢とともに、収入が減れば物欲が減り、退職すれば権勢欲が弱まり、体力が落ちると性欲も減退し、その上、長年の人生経験が自己の限界線というか領分を認識させるサインを出してくれます。これは自然が我々の煩悩を少しでも軽くするように手助けしてくれているからだろうと理解しています。煩悩を少なくするということが、生きて行くことを容易にしてくれるのなら、歳をとるということは満更悪いことではありませんね。最も、個人的には全く煩悩を失くしてしまいたいとは思っていません。生きて行くパワー源として少しだけは別にとって置きたいと考えています。こうして心を和ませて余裕が出来ると、自分の周りの情景に目が転じることが出来る・・・、そこには花や草木、風や雲、太陽や星、川や海ありと、大自然が目前にあり、それに抱かれているという喜びを感じることが出来るようです。生きて行くのはなんと素晴らしいことだろうかを知らせてくれるようです。欲張らずではなく“少しだけ欲張って”が私の人生観です。

先程、死は生の対極ではないと書きましたが、文学作品では死は愛と結びついて美化されて語られるケースが沢山あります。
　「愛は死と結びつくことによって世俗の生に打ち勝ち、死はまた愛を完成させて、恋人達を究極的に結び付け、永遠の生を与えるものである」

これは「若きヴェルテルの悩み」を論評した人の記述ですが、残念ながら作者の名前を忘れてしまいました。
愛のために死ぬことによって、その愛が永遠に生きるなんて言われても、俗物の私には、叶わぬ恋に絶望して自殺してしまったヴェルテルのハート型の魂がふわりふわりと空中を彷徨っていることが、それがどうして永遠の生かと勘繰ってしまいます。世俗でないあの世が仮にあるとしても、本人が感知できなければ・・・と言い出せば、魂の存在、神仏を信じない私の出る幕ではないのでしょうね。一生を懸命に生きて行けばその最終は“一瞬の点”であると思えば、生きること自体に重点を置きたくなります。

もう一つ、愛による死を美化（醜化？）させようとした小説、デュマ作の「椿姫」があります。主人公が愛していた恋人の死に目に会えず、最後にもう一目と彼女の墓地を暴いてしまいますが、そこにはあの美しかった彼女の姿はなく、体中にウジ虫がうごめく死体が・・・なんてまるで怪奇物語です。どんなことがあっても埋葬だけは避けたいところですね。。

この愛を死によって完成させようとした作品は日本にもあり、その一つが近松の「曽根崎心中」です。
今回の我々のタイトルが「生と死」と聞いて、真っ先に浮かんで来たのが、この「死に行く身をたとうれば」という箇所でした。
「*此の世のなごり。夜もなごり。死に行く身をたとふれば　あだしが原の道の霜。一足づづに消えて行く。夢の夢こそ　あはれなれ。*
あれ数ふれば暁の。七つ時が六つ鳴りて残る一つが今生の。鐘のひびきの聞きおさめ。寂滅為楽（じゃくめついらく）と　ひびくなり。・・・・」
長くなりますがこの後、「*・・・梅田の橋を鵲（かささぎ）の橋と契りていつまでも。我とそなたは女夫星（めおとぼし）。必ず添ふとすがり寄り・・・*」と続きます。
これは大阪商人徳兵衛と遊女おはつがこの世では一緒にはなれないが天国ではと心中に至る、道行の場面です。話しは少々横道にそれますが、どうしてこんな道行のセリフを暗記したかと今では不思議ですが、語呂が良かったからでしょう。覚えたのはもう半世紀も前の話でしたが、最近は物忘れが酷いのに、ひと昔もふた昔も前に覚えた詩とか文章は不思議とよく覚えているものなのですね。

時々過去を振り返りながらも、その思い出を懐かしみながらも、時には反省しながらも、そして煩悩をいくらか携えながら日々を生きて行くのが人生であるなら、もう後戻り出来ない、進むしかないと、「そうですね。そうしましょう」という気持ちに自然になってきます。
お釈迦様が亡くなられる前に、弟子のアーナンダに「お前たちは自分を明かりとし、人をよりどこにするな、仏法をよりどころにせよ、他のものに依るな」と言われたそうです。「またこの世は美しい、人間の生命はなんと甘美なものだろう」とも言われたそうです。私にはお釈迦様の説かれる“仏法”の知識がありませんが、この世には何か“大いなる力”が存在するかもしれないとは思うことが出来ます。
そのおおいなる力をよりどころにして、少しだけ欲を持ちながら、この世は美しい・・・と思いつつ生きて行きたいと願っています。

お亡くなりになった渡邊さんの、奥様信子さん宅を夫と共に訪れ、お花をお供えしてきました。我が家のお留守番電話に、「小川さーん、渡邊ですー。お元気ですか」の声が残っていますので、いまだにデリートせずにそのままにしてあります。お亡くなりになった後も存在感があるのでしょうか、彼のことを思い出しては懐かしんでいます。２月４日に「偲ぶ会」が彼の家で開かれるそうですが、皆様は出席されますか？　よく「財布を失くした」とか「フリーダム・パスが見当たらない」とかで騒いでおられましたから、三途の川をうまく渡ることが出来たかと少々心配です。でも日ごろの行いが良かったから大丈夫でしょう。その内、今回の我々のテーマ「生と死」について何かメッセージが送られてくるかもしれませんね。いつものように「コンピューターの調子が悪いので、原稿が遅れて・・・」なんて、それではその時はお留守番電話にメッセージを残しておいてくださいね。

憧れの音楽家

川瀬　和広

昨年の９月から、アマチュアオーケストラに参加してチェロを弾いている。
参加するアマオケを選ぶのは、実は容易ではない。さすがロンドンには沢山のアマオケがあり、高度な演奏を追求するのか、それとも楽しむことを第一にするのか、といった方向性、求められる演奏技術のレベル、レパートリーなど、様々である。更には練習の頻度や曜日、場所といった現実的な都合も考えなければならない。インターネットでいろいろ調べた末、平日夜に職場と自宅の中間の場所で練習していて参加しやすく、入団オーディションがなく、程よく音楽を楽しんでいる様子のオーケストラに入ることにした。オーケストラがその名を冠している、骨董市で知られる街の雰囲気も、どこか下町風で、気に入っている。

私はこれまで、バロック音楽や弦楽合奏を中心にやってきたので、実はオーケストラ曲を弾いた経験は多くない。聞いたことのある曲でも、聞くと弾くとでは大違いで、やる曲がどれも新鮮な体験である。ちょっと専門的な話になるが、バロック音楽は、チェロ、コントラバス、チェンバロ等で構成する通奏低音というパートが音楽の基礎を構成し、その上にヴァイオリンなど他のパートが乗る形で作られている。後世の音楽では、コントラバスのパートが独立し、チェロパートはいつも和音の基礎を担うだけではなくなり、時として自由に動くところが、大きく違う。

初めて参加した昨年１２月のコンサートでは、ベートーヴェンの交響曲第５番「運命」を弾いた。例の「ダダダダーン」という単純極まりない素材から、かくも壮大な音楽が紡ぎ出される様は、実に見事だった。全ての音符に必然があり、無駄な音が一つたりとも無い、というほどの彫琢ぶりに、ベートーヴェンの狂気と言ってもいい執着心を感じさせた。

１月にはロンドン郊外で週末合宿があり、私は日帰りでの部分参加になったが、その時には初見（事前練習なしで楽譜を見ながら弾くこと）でブラームスの交響曲第３番をやった。ブラームスの曲は、漫然と聞いていると拍子の頭に聞こえる箇所が、実は楽譜上の小節の頭とずれていたり、裏拍を弾くシンコペーションが多用されていたりと、リズムがとても複雑で、すぐに迷子になってしまう。各パートが、微妙にずれながら重なり合うことで、ブラームスならではの、迷いに満ちた、ずっしりと重みのある音楽が作られていることが、いやでもわかった。

今は、今年４月のコンサートに向けて、ドヴォルザークの交響曲第９番「新世界より」を練習している。親しみやすいメロディで知られる曲だが、そのメロディが断片に分解されて様々なパートに散りばめられ、他のパートは別のメロディ要素を沿えたり、弱音のトレモロのざわめきで背景を形作ったりと、パズルのように細かく組み合わされて曲ができている。そのため、チェロパートだけ練習していても、全体の中にどうはまるのかが想像しにくい。これはソナタ形式の作曲法であって、ロマン派の交響曲であれば同じようなものかなとも思うが、どうもドヴォルザークでは、メロディ以外の伴奏が効果音的に扱われる度合いが強いように思う。それだけに、合奏練習でピースが嵌まり、音が組上がった時の面白さには格別のものがある。

オーケストラに集う人たちは、老若男女、バックグラウンドも様々ながら、音楽を愛するという一点でつながっている。静かで品が良く、どこか浮世離れしたところのある人たち、という印象は、日本のアマオケの人たちとも、洋の東西を超えて共通しているのが面白い。チェロパート最長老の７０代女性は、とあるユダヤ系ドイツ人の作曲家と同じ姓なので、家系がつながっているのかと聞いてみたら、実際にお祖父さんあたりではつながっており、彼女の家族は第二次世界大戦の時に英国に逃れてきたのだという。そんな歴史

のつながりを実感できるのも、ロンドンのオーケストラならだと思う。

コンサートマスターはとても上手で、よく通る音と、揺るぎないリズムで、迷いなくオーケストラを導いてくれる。それもそのはずで、ロイヤル・カレッジ・オブ・ミュージックでヴァイオリンを学んだのだそうだ。でも卒業後はプロにはならず、金融関係の仕事をする傍ら、音楽活動をしているという。趣味で音楽を楽しむにしても、楽器が上手であるに越したことはない。もちろん、彼の今の技術は厳しい修練の成果であり、私が楽器の練習に投入してきた努力量はその足元にも及ばないのだが、実にうらやましい音楽との付き合い方ではないか。プロの音楽家に憧れたことはないが、そんなアマチュア音楽家には心底憧れる。

森の妖精・氷河期からの生き残り

ビドル　惠

本州と北海道を分けているブラキストン線(動物分布境界線)の事は以前にも書いた。これは、北海道の動物が本州とは微妙に異なる、独特の生態系を持つ事を指摘した動物学者ブラキストンに因んでいる。この境界線となっている津軽海峡は最深 449m、幅は一番狭い所でも 19.5km ある上に、潮流も強くて速いので、陸上性動物の往来を妨げていた。

又、最終氷河期に、北海道はサハリン(樺太)や千島列島を通じてユーラシア大陸と繋がっていたのに対し、本州は朝鮮半島と陸続きだった事に起因するとも考えられた。これが本州に生息する動物たちの殆どが大陸系なのに対し、北海道には北極圏やカナダなどを含む、北方系との共通点を持つ動物たちの多い理由である。今回はこの氷河期に北海道に移り住み、独自の進化を遂げた動物たちを紹介したいと思う。

『正体不明の鼠か？エゾナキウサギ』

北海道の中央(道央)から道東の山岳地帯には、“生きた化石”とも言われる、たいへん珍しいエゾナキウサギ＝北海道観光・PR キャラのキュンちゃんが生息する。ウサギと呼ぶには少々変わった風貌をしており、顔もちょっと“ぶさかわ”だ。暑さに弱く、標高 800 メートル以上の冷涼な高山帯にのみ生息するので、装備を整えた登山者でなければ見る事も出来ない。

体長は 10～20cm、体重 60～150g、耳、手足、尻尾など全てが短く、被毛は赤褐色から灰褐色で “尻尾の無い大きめの鼠”といった印象だ。捕食獣や猛禽類から逃れ易い、大小の岩が積み重なった“ガレ場”に集団で穴居し、外敵に対しては協力し合って(警告音を発して)防衛を行う社会性を持つ反面、排他性も強く、繁殖期になるとツガイの雄は「キイッ、キチーッ」雌は「ピイーッ、ピキッ」と高音で鳴いて縄張りを主張する。夏の間は殆ど涼しい岩の下に隠れているが、秋になると“貯食”という越冬準備(冬眠はしない)を始め、エゾリンドウ、エゾムラサキツツジといった高山植物の花や葉、茎、木の実、シダやコケモモ、茸などを忙しく駆け回って集めては巣穴に持ち帰る。

臆病ですばしっこいエゾナキウサギは、長い事その存在すら知られていなかった(アイヌ民族の神話にも登場しないし、呼び名すら無い)。明治の後期に、十勝管内・然別(シカリベツ)湖周辺に入植して来た開拓民が伐採作業中に見つけ、色の似ているところから“ごんぼネズミ”と呼んでいたらしい。正式に認識/識別されるのは昭和3(1928)年になってからで、発見の遅れた理由としては、鳴き声がエゾシマリスに酷似していた為に、別の動物が存在すると思われていなかった事が挙げられる。

昭和になって始まった植林事業の際、植えたカラマツの苗木が食い荒らされたり、持ち去られるという事件が発生し、その齧り跡がネズミやリス、ウサギとも異なる為に、“特殊・野ネズミ”として営林署が捕獲に乗り出したのである。捕らえられた数匹の個体を、当時の北海道帝国大学(現在の北海道大学)で解剖/研究した結果、満州に生息するマーモセット(タルバカン)に似ているけれど、形態上異なる点も有るので、北海道独特のナキウサギと命名された。

現在は更に研究が進み、シベリア大陸に棲むキタナキウサギ(英名 Siberian Pik a)の亜種である事が判明している。氷河期にマンモスと共に北海道に南下して以来、独自の進化を遂げて生き延びて来たので、エゾナキウサギ(学名 Ochotona yesoensis)と改名されたが、その正確な個体数は現在でも不明のままだ。分かっているのはエゾシカと生息地域の棲み分けをしているらしく、開拓当初にエゾシカの数が激減すると、エゾナキウサギの数が異常に増えたとか。近年はエゾシカの数が農作物に害を及ぼす程に増加しているので、その数は減っていると懸念され、準絶滅危惧種に選定されている。

ハムスターとウサギの可愛さを凝縮したような、手のひらサイズのまん丸なエゾナキウサギは、涼しくて綺麗な空気の環境でしか生きられないので(町中で無理に飼おうとすると、湿度や排気ガスで肺にカビが生えて死んでしまうそうだ)、動物園などでの飼育展示もされていない。

『白い山の妖精、エゾオコジョ』

エゾオコジョはイタチ科オコジョ種の亜種で、本州のオコジョよりやや大きい。体長は22～24cm、尾の長さは7～9cm、毛色は下顎から腹側が白色で尾の先端が黒く、背側は夏が茶褐色で冬は真っ白になる。標高1200m以上の高山岳地帯を好み、特にエゾナキウサギの棲む岩場/ガレ場などに生息する。既存の穴や岩の隙間などに巣を作るが冬眠はせず、繁殖期以外は単独行動をする。可愛い顔をしているが実は獰猛なハンターで、流線型(短足胴長)のしなやかな体を駆使して目にも止まらぬ素早さで狩をする。野ネズミ、両生類、昆虫などを食し、跳躍力にも優れているので、すばしっこいエゾシマリスやエゾナキウサギの天敵だ。気性も荒く、自分より大きなエゾユキウサギやエゾライチョウを襲う事もある。

エゾナキウサギを撮影しようと、ガレ場でカメラを構えて居ると、エゾオコジョがひょっこり顔を覗かせる事があるそうだ。エゾナキウサギの天敵とは言え、その愛らしい姿に思わず見惚れてしまうのだとか。エゾオコジョは、明治の頃から毛皮を取るために乱獲されて生息数が激減し、更に昭和の毛皮ブームの時に、海外から輸入されたミンクが逃げて野生化した為に餌不足に陥り、現在は準絶滅危惧種に指定されている。アイヌ語ではウパシチロンヌプ(雪のような狩をする獣)、すばしっこい上に個体数が少なく、滅多に見る事が出来ないので“山の妖精”と呼ばれている。

『ヨーロッパで食された、エゾライチョウ』

北海道には本州のヤマドリ(キジ科)が存在しないので、通常この鳥をヤマドリと呼んでいるが、正式名はエゾライチョウだ。本州の日本アルプスに生息する、天然記念物のニホンライチョウ(Rock Pt

armigan)は羽毛が冬には真っ白になるが、エゾライチョウは年間を通して羽の色が変化しない亜種(Hazel Grouse)である。研究の結果ではシベリア大陸のライチョウに属し、氷河時代(大陸種との分岐時期は約４万年前)の生き残りという事である。

雄雌ほぼ同じ大きさで、ウズラよりやや大きく体重 350～400g、全身の羽は黄土、茶、白の斑模様、足まで白い羽毛に覆われており、雄は喉の部分が黒い。標高 200～800m の亜高山帯、針葉樹と広葉樹が混じった針広混交林に生息する。成鳥は植物食で木の芽、枝、葉、果実、種子などを食べ、幼鳥は昆虫などの動物質も多く摂る。アイヌ語でフミルイ(強い音)と呼ばれるエゾライチョウは、鳥類には珍しい一夫多妻制で、雄は甲高いホイッスルを吹く様な声で鳴いて縄張りを主張し、10 羽ぐらいの群れを形成するが巣は特に作らない。夏の間は樹上、冬は雪中に浅い穴を掘って寝ぐらとする。

美味の為、欧米では七面鳥が一般に浸透するまでの間、クリスマスのご馳走は“グラウス”のローストだったとか。1920～50 年代には北海道から年間 5～6 万羽のエゾライチョウが、シベリア鉄道でヨーロッパに輸出されていたそうだ。昭和の頃の我が家では、父が鹿猟で冬山に入る毎に仕留めて来てくれたので、食卓に度々登場し、お煮しめや蕎麦、元旦のお雑煮もエゾライチョウの出汁だった。脂身の少ない赤肉で、雉よりも柔らかく食べ易い。現在は天敵のキタキツネが増えた為に生息数が減っている。

『森の小人、エゾヤチネズミ』

エゾヤチネズミは、シベリア大陸やサハリンに棲むタイリクヤチネズミの亜種で、北海道や周辺の離島(利尻、礼文、大黒、天売、焼尻島)にのみ生息する。体長 10～14cm、尾の長さ 4～6cm、体重 27～50g、被毛は背側が灰褐色から暗褐色で、腹側が灰白色。道央から道東の草原、ハイマツ林など、草木層の被度や密度が高く、落ち葉層が厚くて隠れ易い所に生息する。食物繊維を多く含むイネ科の草やカヤツリグサ、種子、果実、稀に昆虫も食べる。冬季でも冬眠はせずに雪の下にトンネルを掘り、樹皮などを齧って凌ぐ。

天敵はキツネやフクロウ、ミンク、テン、オコジョなど殆どの捕食獣で、可愛らしい顔を見ると何やら可哀想な気持ちになる。アイヌ語ではエレム(森の小人)と呼ばれているけれど、食べ物の少ない冬から早春にかけては、収穫の終わった畑に現れて穀物のおこぼれなどを探す。春先にトラクターで畑を耕すとエゾヤチネズミが一斉に飛び出すので、それを狙って子育て中のキタキツネが集まって来るそうだ。

エゾヤチネズミは数年おきに爆発的な繁殖をし、カラマツやトドマツの樹皮を食い荒らす為、エゾシカと並んで農林業に被害をもたらす“害獣”とされている。又、寄生虫“エキノコックス”の中間宿主としても知られているので、発生予測や殺鼠剤の散布などの対策が講じられている。

『おしゃもじを持って逃げる、エゾクロテン』

エゾクロテンはシベリア大陸のクロテンの亜種で、毛色がかなり淡い色をしている。明治までは北海道の全域に生息していたが毛皮を取るために乱獲されて、道央と道東の森林に僅かに生息するのみになってしまった。1940 年代、代わりにホンドテンが道南地方に持ち込まれ、繁殖場から逃げた個体が野生化した為に本種との交雑の可能性もあり、純粋種の絶滅が危惧されている。

体長 40～50cm、尾は 10～15cm、体重 1～1.3kg。滑らかで美しい被毛は淡黄色から褐色で、前後の脚と尾は黒っぽい濃褐色、冬毛は夏より更に淡い色合いに変わり、雪の上を歩き易いよう足の裏まで毛が密生する。冬眠はせずに、繁殖期以外は昼夜を問わず単独行動をする。食性は雑食だが動物質を好み、野ネズミ、鳥、両生類をはじめ、柔軟性に優れて木登りも上手いので、エゾリスを追跡したり大きなエゾユキウサギなども捕食する。植物はヤマグワ、サクラ、ヤマブドウ、マタタビ、コクワなどの果実を食べる。

エゾクロテンはアイヌ語でカスペキラ(おしゃもじを持って逃げる)と呼ばれる。これは、夜間に人里に出没しては家畜(鶏)を襲ったり「何故？」と思うような物を盗んで行く～という変わった習性を持つ事に由来するそうで、何やら可笑しい(針金やスプーンを集める、カササギ＝Magpie に似ている)。警戒心の強いエゾクロテンは、時おり後脚で立ち上がって周囲を見回す“目蔭”という独特の仕草が可愛らしく、写真集やカレンダーなどの人気も高い。展示は釧路市動物園だけなので、機会が有ったら是非見に行って欲しい。

『雪原を疾走する、エゾユキウサギ』

本州に生息するニホンノウサギの亜種と思われていたエゾノウサギは、研究の結果、シベリア大陸のユキウサギの亜種である事が判明して、エゾユキウサギと改名された。アイヌ語でイセポカムイ(小さな神様)、又はエペッケカムイ(顔の裂けた/兎口の神様)と呼ばれ、北海道と国後(クナシリ)島の平野から亜高山帯にまで広く生息する。

体長 50～60cm、体重は 1.5～3.95kg と、日本の野生の兎としては最大級だが、身体の大きさの割に耳が 7～8cm と短く、これは寒冷地に適応して耳からの放熱を防ぐ為と考えられる。夏毛は腹側がやや白っぽい以外は全体がほぼ灰褐色で、冬毛は耳の先端の黒色を残した全身が真っ白に生え替わる。白色化は日照時間に起因しているとか、その進行速度は生息地の気温や、積雪量などの気象条件に影響を受けるそうだ。一番の特徴は手足が長い事。特に後ろ足が非常に大きく、雪の上を歩く“カンジキ”の役割をしている。おまけにその脚力は抜群で、日本の哺乳類の中でも最速の時速 80km/h で走ると言われる。

エゾユキウサギは昼間は身を隠している事が多く、主に夜間に活動する。草食性で食料の乏しくなる晩秋や春先は畑の野菜を食べに現れ、真冬は根雪を 50～150cm も掘って身を隠し、樹皮や枝、下草や新芽を食べて凌ぐ。農作物に害を及ぼす為に狩猟獣とされ、年間数万頭を捕獲した時期もあったそうだが、日本イタチの移入やキタキツネの増加、何より植林地や農耕地の減少で、その数はかなり減っている。

昭和の頃の農家では作物を守る為に、畑縁にウサギ捕りの罠を仕掛けていたもので、翌朝の飯前にこれを見て廻るのは男の子の仕事だった。罠に掛かって凍死した(或いは絞めた)ウサギを何羽も肩から下げ、頬を真っ赤にして帰ってくる少年達の顔は誇らしげだった。農家ではウサギの肉を食べる事は滅多に無く、毛皮の方を塩漬けにして溜めて置き、春先に毛皮商に引き取ってもらう。特に白い冬毛は喜ばれたので、害獣駆除と子供の小使い稼ぎの一石二鳥になっていたようだ。

欧米では白いウサギの脚は“Good luck Charm”として、キーホルダーやペンダントなどに加工されているのを見かける事もあるけれど、エゾユキウサギの脚では大き過ぎて、首から下げるには不向きだろうなぁ。

ベッリーニのオペラ

原田孝雄

イタリアではベッリーニの姓は有名人が多く、ベネチア派ルネッサンスの芸術家親子三人、Jacopo Bellini（父親）、Giovanni、（兄）、Gentile（弟）、又、スペリングは若干異なりますが、バロック期の彫刻、建築家 Gianlorenzo Bernini、そして本稿の作曲家 Vincenzo Bellini ヴィンチェンツォ・ベッリーニと続きますが、きっとまだまだあるのでしょう。

ベッリーニのオペラ**「カプレーティとモンテッキ」**（I Capuleti e i Montecchi）はシェイクスピアでおなじみのロミオとジュリエットの悲劇が取り上げられた彼の第 6 作目です。しかし台本作者のフェリーチェ・ロマーニはその題名が示す通り、ヴェローナの有力貴族の権力争いに焦点を当てて書き上げたので、登場人物の名称はほぼ同一ですが、シェイクスピアに比べるとストーリーは少々単純化されています。

この時代のオペラは音楽と言語がスローモーションで流れるような構成になっているため、ベル・カント（Bel Canto）「なめらかな歌、落ち着いた歌」と称されています。ベッリーニのオペラでは全てにメロディーがつけられており、モーツァルトの時代のように、筋を説明するため簡単な伴奏のみしかついていなかったレチタティーヴォ（セリフ）もすべて歌曲になっています。このオペラでもっとも美しい部分は第 1 幕 4 場の、ジュリエットが我が意に染まない結婚を強いられて、自らの運命を嘆くレチタティーヴォ Eccomi in lieta vesta 「婚礼の晴れ着を着せられた私を見て」で始まり、ロメオとのデュエットにつながっていく場面です。ロメオはオペラの冒頭に敵カプレーティ家の会議の席に乗り込み、和平交渉にのぞみますが不成功に終わったため、ジュリエットに２人で駆け落ちすることを提案します。が、彼女は親に対する恩と義務感に縛られて行動できません。この後はシェイクスピア劇と同様、ジュリエットは仮死を装ってロミオと恋の逃避行を計画しますが、彼女の意図を聞かされなかったため、ロミオは死んでしまったように横たわるジュリエット見て絶望の果て毒をあおってしまいます。仮死から目覚めたジュリエットはそれを追うように、ナイフをわが胸に突き刺します。死に瀕して２人で歌うアリアは悲劇的というより抒情的です。それはおそらく女性と女性のデュエットだからかもしれません。2008 年の CD 解説書にはロメオ役を初演以来女性が演じるのは、当時、高い音を出せるカストラート（カウンター・テナー）がイタリアにはおらず、ヘンデルの時代はイタリアから高給で呼び寄せることが出来ましたが、最初からメゾソプラノの主役を念頭においてベッリーニが作曲したとあります。ネトレブコのジュリエットとディドナートのロミオのデュエットは最高でした。

ベッリーニの次作**「ノルマ」（Norma）**はローマ支配下のガリア（今のフランス）で展開する、ケルト（ゲルマン人に支配される前のフランス人）のドルイド教徒たちの反乱が背景になっています。ローマ人総督ポリオーネはドルイド教徒たちの族長の娘で巫女の長、ノルマとの間に隠し子がありますが、今では若い巫女のアダルジーザに恋しています。世に言われる三角関係です。第 1 幕ではヤドリギ Mistletoe を崇める儀式を執り行う場面の Casta Diva (清らかな女神)の有名なアリアの後、ノルマの秘められた思いの告白、そしてこの幕の最後までデュエットが続きます。ノルマ（ソプラノ）とアダルジーザ（ソプラノまたはメゾソプラノ）のデュエット、さらにそれに続くノルマとポリオーネのデュエットで、次々と明らかにされていく事実は、徐々に緊張感と期待を高める役目を果たしています。ヒロインのノルマは、途中のアダルジーザとポリオーネのデュエット以外は舞台に出ずっぱりというスタミナのいる難しい役です。第 2 幕ではポリオーネはケルト側に捕らえられます。巫女でありながらドルイドの教理に背を向けたノルマは、今ではガリア側に捕らえられたポリオーネと和解し、最後は２人で処刑台に上ります。
マリア・カラスの登場前は難度の高いソプラノ役のノルマを歌える歌手がおらず、多くのオペラハウス

では長い間通常の演目から外されていたほどだったようです。残念ながら私もこのオペラはロンドンのオペラハウスでは観る機会がありませんでした。
ベッリーニにおける台詞と音楽の連携、言い換えれば声楽と器楽の調和は「ノルマ」で大成功を収め、指揮者ワーグナーやヴェルディが称賛しています。ヴェルディはこのオペラを念頭にデュエットばかりのオペラを書きたいと述べています。

「清教徒たち」(I Puritani) このオペラはイギリス議会とスチュワート王朝の内戦を背景にしています。議会派の南部の拠点の城に、中立派の騎士アルツーロが彼の許婚、城主の娘エルヴィーラを訪れるところから始まります。彼は、城では正体を明かされず軟禁状態になっていたスチュワート家女王を偶然救い出す羽目になり、２人で城から脱出します。これを知って恋人に捨てられたと思い詰めたエルヴィーラは発狂してしまいます。狂乱状態になるオペラと言えば、求婚者を殺害してしまうドニゼッティの「ランメルモールのルチア」(Lucia di Lammermoor) を思い出しますが、勿論、狂気の果てに死んで行くルチアと恋人によって狂気が治ってしまうエルヴィーラの２人には大きな違いはあります。私が最初に入手した DVD には 2001 年バルセロナのリセウ歌劇場での上演でした。当時 55 歳ながら完璧な 20 代ヒロインを演じたグルーベロバは、まさにお見事という一言につき、音楽、言語、演技を巧みにコントロール出来ていたと思えました。第 2 幕の O rendetemi la speme, o lasciate, lasciami morir「私に希望を戻してください、さもなければ死なせて下さい」で始まる部分は、初演当時よりの狂乱の場として有名で、名だたるソプラノ歌手達がそれぞれの持ち味を出して競い合い、後続の「夢遊病者」の狂乱のアリア同様オペラ史を飾っています。このオペラの最後は議会派から裏切り者として追われているにも拘わらず、アルツーロは一目エルヴィーラに会うために敵の陣地に潜入し、捕らえられますが、処刑直前に内戦の終結が伝えられ、恋人達は救われ彼女の狂気も回復し、メデタシ、メデタシで幕が下ります。

「夢遊病者」(La Sonnambula) は悪役がいない、誰も死なない、それでも退屈はしない、こじんまりした作品です。緩やかなテンポで続くアリアはもともと室内劇向きで、1970 年代には映画化の試みがありましたが、オペラ設定の非現実性が露呈され、成功作ではなかったようです。チロルの寒村が舞台で、夢遊病者アミナが許婚者エルヴィーノと婚約の儀式を交わします。その後、彼女は会場のホテルにたまたま投宿していたロドルフォ伯爵の部屋に迷い込み、その部屋のベッドで眠ってしまいます。それを幽霊退治に出かけてきた村人たちに見つかり、騒ぎを聞きつけてエルヴィーノが駆け付け、婚約が解消になってしまいます。そのショックで以前からの夢遊病が悪化してしまいます。アミナが第 2 幕 2 場のアリア Ah non credia mirati si presto estinto, o fior 「愛しい花よ、こんなに早くしおれてしまうと思ってもみなかった」をしんみりと歌います。その後、エルヴィーノは彼女が夢遊状態であったことをやっと理解し、すべてを元に戻して、ハッピーエンドになります。
今でも DVD が入手可能ですが、2004 年大きなメトロポリタンの舞台を、小柄なソプラノ歌手、ナタリー・デセイが同様に小柄なフアン・ディエゴ・フロレスと共演してこの作品で成功を収めました。その後、デセイは喉の不調のため舞台から降板せざるを得なくなりました。2001 年から 2005 年にかけて声帯の手術を受けた彼女は 2012 年、同作品に再度挑戦。それは、声量の衰えを十分カバーした細やかで円熟した演技を、パリのオペラ座で見せている断片を YouTube で見ることができます。特にフィナーレの場では、食卓に上り長い腕を振り上げて、“ヤッタぞ”とばかりに歌う姿は、舞台復帰の喜びをかみしめているようにも見えます。

ベッリーニはシシリア島のカターニア出身で、ここでは早逝 33 歳で没した作曲家を記念して、パリのオペラ座を模した Teatro Massimo Bellini (1890)を建設。パレルモの Teatro Massimo も同様で、今でもベッリーニの作品が演じられています。
この Bellini もしかり、その他 Raphael や Masaccio や Keats や Mozart 等の短命な天才たちに思いをはせる時、「しかし長生きすることも大変な仕事ですぞ」と弁解したくなるわが身に思わず苦笑の念を禁じえません。

Haruki Murakami をめぐる冒険

—「この僕らの住んでいる世界には、いつもとなり合わせに別の世界がある」
(村上春樹著「海辺のカフカ」第 37 章より）—

中沢賢治

2017 年の「騎士団長殺し」以来 6 年ぶりになる村上春樹氏の新作長編が 4 月に刊行予定と新聞紙上で報じられた。久々の長編作品ともなれば話題になるのは当然だが、その題名として予告されている「街とその不確かな壁」が小説家デビューからまだ新しい時期に書かれた作品の題名と似ていることが、村上ファンとしてはとても気になるところだ。「風の歌を聴け」が発表された 1979 年にわたしは学校を終えて社会人になった。それから読み続けて 40 年ほどの付き合いになる。わたしなりに好きな作品を 3 つ選ぶとしたら「風の歌を聴け」、「羊をめぐる冒険」、「国境の南、太陽の西」である。この小説家との関わりについて、ロンドンに住んでいた頃の思い出をたどりながらふり返ってみたいと思う。

1987 年の「ノルウェイの森」で、村上春樹の小説は社会現象となった。この作品に対しては相反する感情を抱いた記憶がある。扱われている材料はデビュー以来の短編とかぶるものもあって懐かしい感じがするのだが、物語のインパクトがとても強くなっている。わたし自身が若かった頃のあまり楽しくない記憶に無理に向き合わされるような感じがした。他人事ではないように感じて読んでしまう人たちがたくさんいたからベストセラーになったのだろうと思う。読まずにはいられないが、好きな本だと公言するのをためらってしまう点が、太宰治の小説群に対する気持ちに似ている。それまでひっそりと村上春樹の読者であることを得意に思っていた立場からは、この小説家が急に売れっ子作家になってしまったことも少し残念な気がした。次第にこの小説家から少し距離を置くようになった。それから長い時間が過ぎた。50 歳を過ぎた頃から、この人の作品群にもう一度興味を持つようになった。仕事で住んだ国々の書店で翻訳された村上作品に出合ったからである。ロンドンでも、サンクトペテルブルクでも、スコピエでも、ビシュケクでも Haruki Murakami の本は大きな書店の日本の小説コーナーに積まれていた。「Murakami が好きだ」という知り合いも多かった。「海外で紹介される日本の小説家」として根強い人気があるのは何故だろうと考えるようになった。

村上春樹　（読売新聞）

「羊をめぐる冒険」などいくつかの長編を例にとれば、村上作品には繰り返されるパターンがある。自分の世界やマイペースで生きることにこだわる主人公がいる。主人公はたいてい地味で目立たないキャラクター設定になっているが、何かしらの強いこだわりを持っている。他者と関わりながら「こちらの世界」で生きていくことに、うまくなじめない主人公は、やがて「ここではない世界」の存在を感じ始める。それが SF 的な現実である必要はないだろう。そういう願望や想像力を持っているというだけの話かも知れない。戸惑う主人公の周りで、あちらとこちらの 2 つの世界で物事はパラレルに進行する。別の世界への「入り口」として古井戸や、深い森や、高速道路の非常階段やらが頻繁に登場する。主人公は「自分は誰なのか？」、「自分はどちらの世界に属しているのか？」などの謎解きを求めて物を探したり、人を探したりする。幽かな世界に浮遊しているものたちをこちら側の世界に誘い出すような形で物語は進行していく。探し求めた人との再会と別離を経て、主人公は自分の属すべき世界を選ぶことにより物語が完結することになる。

村上ワールドを構成する２つの世界は安部公房の小説「砂の女」を連想させる。この小説も海外の書店で見かけることが多かった。突然砂の穴に落ちた主人公はひたすら脱出しようともがく。穴の中で囚人のように砂を掻き出す自分が落ち込んだ非日常の世界と、ついこの間まで自分が所属していた日常の世界についての記憶がパラレルに進行する。映画の「砂の女」でヒロインを演じた若い日の岸田今日子がとても魅力的だった。岡田英次が演じた主人公はたまたま砂丘の穴に落ち込んだことで、それまで気がつかなかった形の自由を手にする。管理社会の中で何かしらの息苦しさは感じながらも、多くの人はそれを選択した主体は自分だと思いながら生きている。安全で快適な暮らしと束縛される息苦しさとを秤にか

けて、その加減を選ぶのは自分だからである。このバランスを問い直し、自らの選択によって生きている実感を確かめようとすることは、国境を越えて理解されやすいテーマなのだと思う。

2015 年に蜷川幸雄演出による「ハムレット」と「海辺のカフカ」がロンドンのバービカン劇場で上演された。宮沢りえが演じる「海辺のカフカ」のヒロインを観たいと思ったが、チケットは売り切れだった。藤原竜也が主役を演じた「ハムレット」のマチネのチケットが取れた。「蜷川版ハムレット」はその 17 年前の 1998 年にも真田広之と松たか子が演じた舞台をロンドンで観ている。この時の母親役が加賀まりこだった。その役を鳳蘭が演じた。1998 年当時、ロンドンに在住だった野田秀樹が前の列に座っていたことを記憶している。白石加代子との共演で藤原竜也が 1997 年に演じた「身毒丸」を観ている。いずれも 1999 年から途上国暮らしを始めるまでロンドンに住んでいた頃の思い出である。上演当日になって諦めていた「海辺のカフカ」のチケットが入手できた。劇場に早めについてカフェで軽く食べて、外の空気を吸っていると遠くの方で藤原竜也が煙草を吸っているのが見えた。

バービカン劇場　「海辺のカフカ」

蜷川版の「海辺のカフカ」には感動した。舞台装置がすごい。高松の図書館がメインの場所ということもあってか、全体を通じてガラスの書棚のようなミニ・ステージが用意され、役者たちはその中から飛び出して、演技する。いくつもあるミニ・ステージの下に車輪がついていて、人力で動かす仕掛けになっていた。図書館というよりは博物館のガラスの箱だ。臨時の大英博物館の世界を作り出したような印象を受けた。物語の中で高松に向かうトラックすらこのガラスの箱に入っているのでびっくりした。さらに凄いのはヒロインの若い日と現在の佐伯さんを演じた宮沢りえがやはりガラスの箱につめられて、冒頭から舞台上の空間を彷徨うことだ。これは白日夢の世界だった。私の席は左端で舞台からすぐの４列目だった。ガラスの箱の中から一点を凝視する宮沢りえと目が合うような錯覚を覚えた。

原作である小説「海辺のカフカ」はとても長い作品だ。作中人物の台詞の形をとりながら源氏物語やら、雨月物語やらについての論考が混じるややこしい小説である。この作品の中に「夢」と「想像力」についての様々な解釈が登場してくる。この小説には佐伯さんという中年の女性とナカタさんという初老の男性が登場する。どちらも謎めいた人物設定である。この２人の「奇妙であいまいな人たち」が幼い頃に母親と生き別れになって育った主人公のカフカ少年と関わりを持つことになる。佐伯さんが主人公の母親なのかどうかの謎解きが物語の鍵でもある。ヒロインが中年の佐伯さんでもあり、15 歳の少女でもあり、主人公の母かも知れないこの物語は複雑な仕掛けでできている。

内田樹氏の「もういちど村上春樹にご用心」（文春文庫）は村上ファンに強くお勧めしたい本である。この本の中の「境界線と死者たちと狐のこと」という文章には説得力がある。同氏は「村上春樹はその小説の最初から最後まで、死者が生者の生き方を支配することについて、ただそれだけを書き続けてきた。。。それが村上文学の純度を高め、それが彼の文学の世界性を担保している。」として、村上春樹を「雨月物語」の上田秋成の後継者として論じている。「海辺のカフカ」の中でも「雨月物語」の「菊花の約」が引用されている。佐伯さんが学生運動に巻き込まれて死んだ恋人を想い続ける姿は「浅茅が宿」を連想させる。内田氏によれば「行き場を失った夢は境界を超えて現実に侵入してくる」のである。その「夢」に登場する人物たちが「霊的に存在するもの」なのか、「幻想にすぎないもの」なのかは、どちらであろうと夢に影響を受けている者にとっては大きな違いはない。

ナカタさんという猫語を理解する登場人物も不思議な人である。幼い頃に森の奥で UFO のような存在に出会い、その時のショックでとっくに死んでいてもよさそうなナカタさんは、たまたま二つの世界を隔てる通路から迷い出て、こちらの世界で生きている。殺されかけた知合いの猫たちを守ることと、主人公の少年が無意識に父親に抱いたのかも知れない殺意をあたかも吸収するかのようにして、少年の父親を殺してしまう。もう一つナカタさんが果たす役割は、主人公の少年に別の世界への通路を示すことだ。ナ

カタさんがいろいろ不思議な力を持っていることも、この人がこちら側の世界に迷いこんできた「不完全な死者」であり、霊的な存在であると考えてみれば納得できる。

この小説の中に「源氏物語」の六条御息所の話が引用されている。これは人間の想念が生霊となって人を取り殺す話である。六条御息所のエネルギーが夢魔となって本人が意識しないまま行動してしまうが、我に返った本人にはその行動の自覚がなく、それを知った後ではその怖しい行動に愕然とする。「海辺のカフカ」の中では、母を失った原因として漠然と父を憎んでいた少年の想いが、どこかでナカタさんに伝わり、ナカタさんが殺人の実行犯になる。少年はその犯罪の計画にも実行にも関わってはいない。人間でないものたちと会話することも、遠く離れた少年の想念をわがものとすることも「人間ではないナカタさん」なら可能だ。

「こちらの世界」と「あちらの世界」で引き裂かれそうになり、自分を喪失しかねない不安定な主人公を描く村上春樹の物語には、主人公をこの世界に引き留めようとする者たちが必ず登場する。村上作品の読者にとっては「海辺のカフカ」のさくらさんはなじみのあるキャラクターだ。途方にくれた少年をさくらさんが「好きだからに決まってるでしょ」と迎える場面は「ノルウェイの森」で「不完全な死者」たちとの交流で消耗しきった主人公を優しく迎えた緑さんの言葉と同じものだ。「ノルウェイの森」のヒロイン直子も「不完全な死者」そのものなので、この本の佐伯さんのイメージに重なるところがある。佐伯さんの友人である大島さんは直子の友人であるレイコさんのイメージに良く似ている。2002 年の「海辺のカフカ」は 1987 年の「ノルウェイの森」の変奏バージョンとも言えなくもない。

「海辺のカフカ」はギリシャ悲劇「オイディプス王」の物語を下敷きにはしているが、それが夢についての物語であることを強調することで、「父を殺して、その妃を妻にする」という悲劇の核心については、「そうかも知れないが、そうでないかも知れない」 不可知の物語としている。口惜しいとは思ったにしても殺したいとまでは意識しないまま生霊となった六条の御息所の罪は問われるべきなのか？ 夢とも現実ともつかない空間でナカタという「不完全な死者」が父親を殺す。その不思議な現象を引き起こしたのがカフカ少年の混沌とした憎悪だったとしたら、その罪は問われるべきなのか？バービカンの客席は日本人よりも現地の人でいっぱいで、上演が終わった時も満場の拍手だった。

「海辺のカフカ」の主人公であるカフカという少年の名前が興味深い。カフカというのはチェコ語でカラスのことを意味する。小説の中では「不条理の波打ちぎわをさまよっている一人ぼっちの魂。たぶんそれがカフカという言葉の意味するものだ」という種明かしがなされている。「カラスと呼ばれる少年」が物語の中に幾度か登場して、主人公に語りかける影のように存在している。人間がカラスに変身する物語として太宰治の「お伽草紙」（新潮文庫）の中に「竹青」という作品があることを思い出した。中国の古典「聊斎志異」の中の原作を材料にして太宰が翻案している。神の使いである竹青が現れて、主人公を神に仕えるカラスに変身させる物語である。チェコの作家フランツ・カフカを意識して題名がつけられたであろう「海辺のカフカ」の世界が、どこかで中国の古典の世界観ともつながっているような気がして面白い。

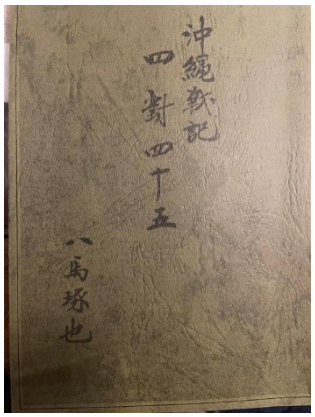
浮遊する霊的な存在を描き、鎮魂の物語を書いたのは村上春樹だけではない。日本に住みついて小泉八雲と名乗ったラフカディオ・ハーンも同じように霊魂にこだわった作品を書いている。この人がアメリカで新聞記者をしていた時代に日本の文化と出会ったことについては NHK でドラマ化された物語が印象的である。ハーン先生はニューオリンズでの博覧会のために訪米していた日本の外交官たちから古事記のイザナギ・イザナミの物語を教えてもらい感動する。自分の出自であるギリシャの神話であるオルフェウスの物語との共通点を見出したことが日本に対する興味の原点となる。大切なものを喪失し、嘆き悲しんだ後で時間や世界を超えて再会する物語は世界の各地に存在しているようだ。突然異界に去る形で失われた肉親や友人や恋人と再会し、きちんとした服喪の儀礼をして死者の国に送り直す。それは世界中のどこでも共感されやすい主題なのだろう。

2021 年の夏に公開された濱口竜介監督による映画「ドライブ・マイ・カー（Drive My Car）」は村上春樹の原作を映画化したものである。この映画はカンヌ国際映画祭で脚本賞、アカデミー賞では国際長編映画賞を受賞するなど国際的にも高い評価を受けた。「きちんとした服喪の儀礼をして」死者をその属すべき国に送り直す物語が、この映画でとても丁寧に描かれている。濱口監督の手でムラカミワールドがほぼ完全に映像化されていて感銘を受けた。

遺された一冊の本

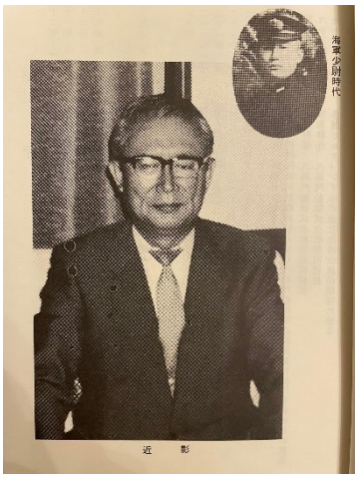
クリストファーひな子

沖縄から生還した後、数多く依頼された講演も一切お受けしなかった亡き父が一冊だけ残した著書。
それは『沖縄戦記　四對四十五』八島琢也作でした。



小隊長だった父の隊で、生還したのは 45 名中、たったの 4 名という意味のタイトル。日本に戻ったのは父親のみだったそうです。
今回、父の履歴をよく見ると、20 歳で大学入学、同年、学徒出陣で海兵隊入隊、翌年 21 歳で少尉となり、沖縄最前線で小隊長となり、22 歳で激戦、負傷、捕虜となり、終戦を迎えたようです。その若さでこれだけの体験を…
何と運の良い父だったのか。

最後、追い詰められ、(既に殺されていた沢山の部下の為に)「仇を打つべき時は来た。今夜皆の生命は陛下に捧げよ」と部下を鼓舞し、突撃、手榴弾を投げようと振り返った瞬間、撃たれて、こめかみから眼の下貫通した。

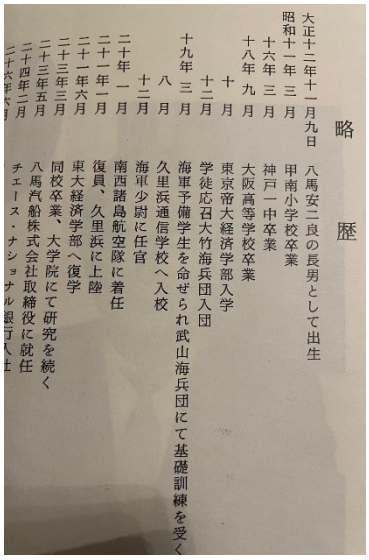


振り向いていなかったら即死だった。
瀕死の重傷の為に自決するという父を、上官思いの部下がとどめ、陸軍野戦病院に辿り着いたが、治療の手段も薬もなく、父は海軍の為に食事も殆ど与えられず、追い出され、結局、気絶しているところを捕虜になり救われた。

ただ、彼の小隊は殆ど全滅だったので責任感の強い父はさぞかし無念だったことと思う。あまり話したがらなかった。
私達の国際結婚に強く反対した気持ちも理解できる。

以前、クリント・イーストウッド監督の、「硫黄島からの手紙」を実家のテレビで一緒に観た時、「どうだった？」と聞いたら、「あんなもんやなかった。座って話したりする暇なんかなかった」と。

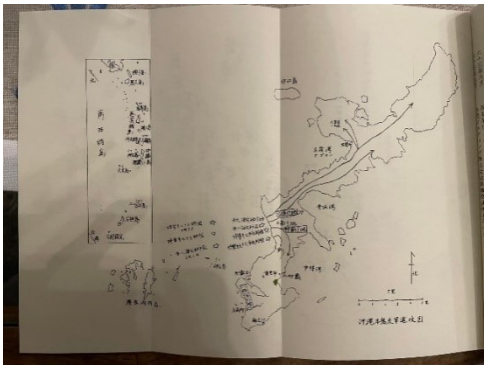
何と、この貴重な本を、私達が 27 年前にイギリスに移住した時に紛失したようで、再度読みたいとずっと思っていた。兄がまだ余分に 2 冊手元に残っていると教えてくれ、昨年末の帰国時に受け取りました。機内で一気に読み切りました。



略歴

大正十二年十一月九日　八馬安二良の長男として出生
昭和十一年　三月　甲南小学校卒業
十六年　三月　神戸一中卒業
十八年　九月　大阪高等学校卒業
十月　東京帝大経済学部入学
十二月　学徒応召大竹海兵団入団
十九年　三月　海軍予備学生を命ぜられ武山海兵団にて基礎訓練を受く
八月　久里浜通信学校へ入校
十二月　海軍少尉に任官
二十年　一月　南西諸島航空隊に着任
二十一年一月　復員、久里浜に上陸
二十一年六月　東大経済学部へ復学
二十三年三月　同校卒業、大学院にて研究を続く
二十三年五月　八馬汽船株式会社取締役に就任
二十四年二月　チェース・ナショナル銀行入社
二十六年六月

父が生き残ってくれたおかげで、私は生まれて来れた。それだけでも、なんてラッキーだったのか。全てに感謝するばかりです。



やはり私の究極の夢は世界平和でしかない。
なぜ人間は戦うのか…。
人１人の命より価値のある物はない。
人間皆兄弟、世界は一つ。

微力でも一石を投じたい。
諦めず生きて帰ってくれた父の為にも。ありがとう。

英国春秋俳壇

エリオットつや子

寒 オ リ オ ン

にわとりの鳴く庭にいる秋の空

神無月若どり産むや初卵

初雪や積もりこの世を隠しけり

美しきチェロを聴いてるクリスマス

クリスマスカードなかなか届かずに

それぞれの都合あわせて新年会

日脚伸び猫落ちついていられずに

三寒と四温つなぎの雨がふる

寒オリオン舞い降りそうな頭上なり

いかんせん行きつ戻りつ雪もよう

心の和(やわ)らぎ

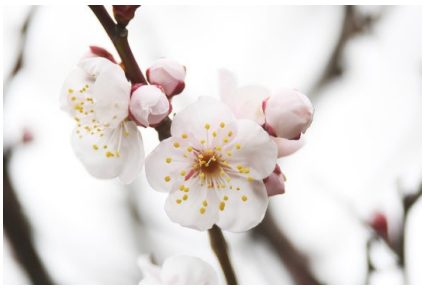
小川のり子

万葉集

「初春の令月にして、気淑(きよ)く風和(やわら)ぎ、・・・」のあと、梅の花がまるで美女が塗るおしろいのように白く咲き、ランの花の香が漂う中で・・・とここには宴の様子が描かれています。これは万葉集の中で、大伴旅人が自宅で開いた歌を詠む会を「梅の花の歌の序」として綴ったものです。空気は清らかで、微風は肌に優しく、白く咲く梅の花の下で開かれた宴はさぞかし集った人々の心をなごやかにしてくれたことでしょう。“麗しい大和の国”との思いを込めてつけられた日本の元号“令和”はここから拠られたそうですが、コロナ禍、戦争、気候変動などと多事多難の中で始まってしまいました。今年はその５年目になりますが、多難のうちのどれかが収束すれば、どれかが終焉すれば少しは我々に心の安らぎを与えてくれるのではと思わずにはおれません。

梅の花

梅の花と言えは、春に先駆け咲き出す楚々とした香りのよい花として、私の好きな花の一つです。しかし残念ながら、まだイギリスでは白梅は見かけたことがありません。わが国では襖絵や掛け軸に描かれるのは、苔むす老梅として姿かたちに風情があり、それらは豪華な気分にさせてくれることさえあります。実物にはお目にかかったことがありませんが， 京都は天球院にある狩野山楽・山雪の障壁画は、金泥を下地に描かれた老梅はまさに絢爛豪華と言っても過言ではないようです。この梅とは比べようもありませんが、日本の実家には父が大切にしていた梅の老木があります。もう何年も花の季節の帰国は叶っていませんが、形よく剪定されたそれは１月から２月にかけて白い小花をつけ、それが終わると鈴なりの青い実をつけていました。実家を継いだ妹が毎年それで梅酒と梅干を作るそうですが、いつか味わった梅干が、その粒の大きさと味の良さで、すっぱいものが苦手な私を心変わりさせるほどの味になっていました。花の後、少し暖かくなると、よく鶯がやってきたものでした。今こうして、梅の花を想い、過ぎ去った昔の諸事に思いを馳せていると、何処からか、ホー・ホケキョ、ホー・ホケキョ、ケキョ、ケキョ、ケキョ、ホー・ホケキョの鳴き声が聞こえてくるようで、いつしか心が和んでくるような気分にさされました。



台本にない妙技

昨年の話になりますが、マーク・ライランス主演の「エルサレム」という芝居を観に行きました。非常に好評で入手困難というチケット、それも少々耳が遠くなりつつある私にもまずまずの席であるのが手に入りました。芝居好きの私は、昔は評判になったのはほとんど見逃すことはありませんでしたが、何故かライランスは名前だけでなく芝居すら全く観る機会がありませんでした。数年前、BBC テレビで人気のあったマンテルの「ウルフ・ホール」で初めて彼と出会い、舞台での彼を見る機会を待っていました。実は、この芝居はすでに２００９年の初演以来ブロードウェイやトロントでも上演され、ロンドンでも何度か主演のライランスで再演されていたそうです。まあそれはそれとして、この芝居を観て非常に驚いたことがありました。勿論１３年前の初演以来ずーと主演であったライランスの演技力は言わずもがなですが、彼が驚くような予想外の“妙技”を披露してくれたことです。それは、主人公が二日酔いでフラフラしながら起き出して来て、いきなり家の外にある風呂桶大の水槽の枠に両手を乗せて垂直に逆立ちをして、頭から肩あたりまでをザブンと水につかる動作でした。おそらく水中にあったのはわずか数秒だったと思われますが、私だけではなく観客も一瞬息を飲む思いになりました。垂直に逆立ちする動作は、まるで体操の選手のように敏捷なもので、昔はやったウルトラ C の演技でした。濡れネズミになった彼がそのままの服装で、もっともラニングシャツだけでしたが、演技を続けたので役者稼業の大変さを思い知らせてもくれました。

そういえばこの種の妙技の見せ場は、オペラの世界でもありました。昨年ロイヤルオペラで、「パリアッ

チョ」が上演されたのですが、主演のカウフマンがキャンセルとなり、何と代わりがアラーニャという非常に豪華な代役に変更されました。アラーニャは主役の道化師を演じるのですが、その彼が舞台で突然宙返り、サマーソルトをみせてくれました。これも一瞬でしたが、もうすぐ６０歳に手が届くという歌手がクルッと美しい形でトンボ返りをしたのですから観客も大喜びでしたが、さすがに「ブラボー」の声は上がってきませんでした。

ついでにもう一つ、これは舞台ではなく DVD で観たものです。「愛の妙薬」というオペラで主人公を演じるヴィラゾンが、恋している相手が一向に振り向いてくれないと嘆きのアリアを歌いながら、“お手玉”の妙技を披露します。勿論これは日本製のお手玉（おじゃみ）でなく、３個のオレンジで行われます。私は片手で２個のおじゃみを交互に空中にほり上げることは出来ますが、彼は両手で３個のオレンジを落とすことなく器用に空中にほり上げる行為を何度もなんどもくり返すことが出来ました。観客は大喜びで、絶大な拍手は鳴りやまず、ブラボーに応えて、アリア付きでこの動作を繰り返し演じてくれました。

これらの、逆立ち、宙返り、お手玉など、役者や歌手の本職以外の妙技は観客の心に、まるでおまけをもらったようにほんのりとした満足感を与えてくれたようでした。

読書礼賛

先日、Waterstones に寄りました。セール中でもあり大混雑で、数冊の本を抱えた人がキャッシアーに列を作っていました。店頭に並ぶ新刊書も訪れる度に次々と入れ替わっているようです。しかし反面、「最近は本を読まない人が増えた」、「出版業界も大変」、「Google の情報で充分」「本は場所をとるからいらない」などの声も聞こえてきます。また、チャーリングクロスロードに並んでいた古本屋も次々と姿を消しています。昔、各種の本のそろったローカルの図書館に感心したのがウソかと思えるほど、最近は DVD や CD にとって代わられているようです。私には現在繁盛している本屋と、本を読まなくなった人との因果関係を説明することは出来ません。が、「ずっしりとした重さの本のページをめくりながら読む」の大いなる信奉者ですので、「デジタル文化の波に乗らなければ、本は邪魔者、読むのは面倒・・・」という言葉は何となく重量感にかける軽っぽい意見のように思えてなりません。

昨年の１１月に一時帰国した際、その３日目に階段から足を踏み外して右足首骨折をしてしまいました。久しぶりの帰国でしたが、ほとんどを家と病院の往還で過ごしてしまいました。しかし、そのおかげで２０冊以上の本を読破することが出来ました。炊事、掃除、洗濯なしのまさに王侯気分そのものでした。おまけにワールド・カップも日本語版で熱い思い込めて観戦することが出来、大いに盛り上がってしまいました。と脱線してしまいましたが、読書に戻ればそれらの中には昔読んだ本も含まれていますが、今回読み返してみて読後感が違っているのに気づきました。昔は若さに任せて筋を追う乱暴な読み方であったのでしょうが、人生経験も深まった今じっくり読み返せば何か別のものが見えだして、まるで新しいストーリーに出会ったような印象を受けたのもありました。誰かのエッセイに、「私は１０年に１度、ディケンズの作品を読み返すことにしている」とあった記憶があります。本棚からずっしりとした本をスーッと抜き出すという動作は、私の喜びでもあり、またそれは私の DNA にも組み込まれているかとも思っています。

最近、文集『英国春秋』の購読者数が激減してしまいました。その理由は前述した“時代の流れ”だけではなく、勿論文集の“内容・質”にもあるのでしょうね。後者の理由は努力すれば向上の余地はありますが、前者の理由を一言のもとに“時代の流れ”と言われるとお手上げで、購読推奨の編集者にとっては、まるで“時代遅れ”のレッテルを張られたしまったような気持がしてしまいます。

過日、書籍について喧々諤々と論じ合う機会がありましたが、それぞれの意見は一理ありで尊重したいと思っています。ただし、迅速・広範・容易・便利さが前面に押し出されたデジタル文化のデメリットにも気付きながら、自身のために「本を読む」努力はずーっと続けて行きたいと考えています。

見回すと本屋の書棚には金箔の豪華本だけではなく、手ごろな価格とサイズの美装丁本（top edge gilt）も並んでいます。自分の本棚にも並べたくなるような本が出版されていることは、いまだ本の収集家は

健在ということなのでしょうね。

グレタ・トゥーンベリーさんのこと

「・・・あなた達大人がこの地球環境問題にしっかり取り組まず失敗ばかりしているから、私が学校で勉強していなければならないこの時間に遠く海を渡ってここまで出かけて・・・・」と２０１９年の国連の気候変動サミットで世界中から集まったお偉方を前に叱責の大声を上げたのは、ほかならぬこの人グレタさんでした。この「How dare you・・・」で始まる少々感情的でありながら非常にパワフルなスピーチに画面を通してでしたが大きな感動を覚えました。歳のせいか少々涙ぐみさえしてしまったほどでした。「・・・経済成長ばかり考えて目前に迫った地球の危機に真剣に取り組むことをしない大人達、我々若者の未来を台無しにするつもりか、我々はあなた方大人たちをウソつきとか悪魔とは呼びたくないが・・・」と次々彼女の口から発せられる叱責・非難・哀願の言葉は、聞き手の胸に直接迫って来るパワーがありました。わずか５分足らずのものでしたが、その間には種々の数字が読み上げられ、その間だけはメモ書きを見ながらでしたが、論旨のしっかりした、また聞き取りやすい素晴らしい英語でのスピーチでしたので、感激するだけでなく感心もしてしまいました。「この人は素晴らしい若者だと！」

その後、目に留まる限り彼女についての記事やまたテレビでのインタビューについて注意を払っていますが、すっかりグレタファンになってしまいました。

スクリーン上では、この気候変動問題に真剣に取り組む真面目一方の感じがするのですが、たまに見せる笑顔は、やはりティーンの少女それで無邪気なものです。とても全力で地球を支えている女アトラスには見えませんでした。それに彼女は中々のジョーカーのようにも見受けられました。いつかの TV ではマカロン大統領からの質問に、もうその内容は忘れてしまいましたが、彼女が「because I am a nerd」(私はオタクだから)と応えたので、彼は目を白黒させてしまう場面がありました。この英語のスラングを彼が知っていたかどうかは疑問でしたが、物おじしない即妙な答えに思わず顔がほころんでしまいました。トランプ前大統領にも、ツイッターで彼の皮肉には皮肉でもって、「明るくて素晴らしい未来を心待ちにしているとても幸せな少女より」とさらっとお返ししているようです。

わずか７～８歳より気候変動問題に目を向け、１５歳くらいからから真剣に取り組んだ彼女がいたからこそ、世界の人々の関心が急に高まって来た地球温暖化問題は、「グレタ効果」のおかげであったと呼ばれても決しておかしくないと思われます。世界的に有名になったおかげで、利用されたりと負のイメージも飛び出したりしているそうですが、今後も彼女には初心の思いを是非貫いてほしいと思っています。

和顔施

先日、散歩の途中見知らぬ若い女性と出会いました。ふと視線が合うと彼女がにこやかに微笑みながら、「Hi」と声をかけてきました。私も思わず笑いながら「Hello」と応えました。たったそれだけの会話というより言葉のやりとりでしたが、なんだかとても爽やかな気持ちにさせてくれました。以前にも、７～８歳くらいの学校帰りの男の子が、ニッコリ笑いながら「ハロー」と言いましたので、つられて「ハイ」と笑顔を向けました。その後何だかとても嬉しい気持ちになり、足取りが軽くなったように思えました。

仏教では彼岸に渡る“三途の川”の渡し船は有料で、キャッシュやカードはダメですが、代わりに六波羅蜜という行いをしなければならないと説かれているそうです。この六つの中の一つに“布施”という行為があり、それは物施、心施、和顔施とに分けられているそうです。物施は“他人へ金品を寄付”で、心施は“他人に優しく親切にする”で、三番目の和顔施は“誰にでもニコニコする”ことだそうです。これが一番簡単に出来そうな行いで、人から笑顔を向けられて怒り出す人はまずないでしょう。ただし世の中には変人も少なくないので、「俺にガンを付けた！」とか「あら、私に気があるのかしら」と変に勘繰る人もあるようですから、笑顔を人に向ける時は気を付けなければなりません。またそれとは別で、ストライキ多発の現在、賀状配達に一カ月以上もかける郵便局職員、フリーダム・パスを一時使用不能にさせる鉄道会社職員、我々の生死の鍵を握る看護婦や救急車の人達の職務遂行拒否には、笑顔を見せる前に、しかめっ面が先立ってしまいそうです。となれば和顔施が一番難しい施しになるようですね。

古典籍スクール

ブランド啓子

１　寺子屋（４）「寺子屋教育の指針」

前回は　式亭三馬の『浮世床』から、お稽古事で忙しい江戸の寺子　お丸とお角の１日をのぞいて見ました。そして女の子の将来をおもんばかって教育に心をくだく母親達の希いが寺子屋の大きな支えになっていることを識りました。今回はその年中行事を見てみましょう。寺子屋は私的教育機関のため、お上からの教育指導要領などはありません。しかし地方によっては，「手習仲間法度書(てならいなかまはっとがき)』(入間郡名栗村上名栗字細ヶ谷、中村忠太郎蔵　天明二年（1782)）の様な一般的な心得を 31 箇条にまとめた教育手引き書が残っています。項目は寺子の生活時間、学習生活、通学途上、金銭無駄遣禁止、防災（火の用心)、友達間の交際、などで手習教科書の最後の部分に付してありました。教師･生徒の双方が指針としていたようです。この様な心得の上に年中行事が組み込まれ、寺子屋は成り立っていたのでした。

2　年中行事

･書初（かきぞめ）

書初は元旦から五日頃までの間に、各寺子屋で行われました。

･席書（せきがき）

席書は毎年二回(四･八月)習字奨励の為に公開で　一度に二名の寺子に席上即席に文字を書かせ（相撲の取組と似ています)、展覧して優劣を決めました。師匠は裃（かみしも)、羽織袴などに身を包み、寺子も羽織袴など各々（おのおの）分（ぶん）に応じた晴れ着を着ました。見物も多く，寺子屋の宣伝にもなる一大イベントでした

･七夕（たなばた）

五節句の中では寺子屋にとって最大の行事でした。『東都歳時記（とうとさいじき)』には、江戸の空一杯に七夕の笹が立ち並んだ壮観な光景が描かれています。寺子達もこの日は師匠の家に泊まり込み七夕飾りの準備をし、芋の葉の露を集めて墨を磨り，学業成就の願いをこめた短冊を書いて笹に結びました。笹竹を飾った翌朝は川に行って硯を洗ったり、古筆で筏を作り草花を載せて流したり，筆塚に備えて供養したりしました。当日は、師匠から素麺や饅頭などのご褒美をいただくのが常でした。

･天神詣（てんじんもうで）

毎月二十五日は学問の神様として知られる菅原道真の命日で、寺子屋はお休みです。寺子達は連れ立って天満宮にお参りし、天神様に手習の上達をお願いしました。

･師匠の花見

江戸時代中期以降　寺子屋の師匠が、揃いの日傘･衣装･手拭などで着飾った弟子たちを引き連れ、花見に出る姿が見られるようになります。百人以上の大行列もありました。当時江戸の就学率は高く、寺子屋間の競争が激しくなるに連れて、師匠の花見も年々派手になり後には 歌や踊り俳諧の宗匠、吉原の新造や禿までもが徒党を組んで 賑わう花見客の中に繰り出しました。

3　競い合う文化

派手な師匠の花見パレードは、当時の寺子屋が重要な社会成員であることを示しています。特に日本橋・京橋・芝・下谷・浅草・深川といった下町における、女子の就学率の高さと多くの女師匠の存在は、師匠の花見の盛況の一因であったと考えられます。

寺子屋の行事の根底には、それは寺子屋に限ったことではありませんが、良い意味でも悪い意味でも　日

本の競い合う文化　があったのです。
次回はこの文化について見てゆきましょう。

図　1

図　2

図　1　名所江戸百景『市中繁栄七夕祭』広重
https://edohanga.jp/one_hundred_famous_views_of_edo/the_city_flourishing_the_tanabata_festival/

図　2　師匠の花見　江戸名所『飛鳥山花見の図』
https://www.ndl.go.jp/landmarks/details/detail429.html

『江戸』とはどんな町?

さて、これまで寺子屋を通して江戸時代を垣間見てきましたが、そもそも江戸とは一体全体どんな町だったのでしょう?

1　花のお江戸の誕生

1590 年、天下人である豊臣秀吉から関東への国替えを命じられた徳川家康。本拠地候補には、すでに都市として完成していた小田原や鎌倉もありましたが、辺鄙な田舎町でしかなかった江戸を選びました。当時の江戸は政治・経済の中心である京大阪からはるかに離れ、茅葺の民家が点在する寒村・寒漁村で葦の生い茂る低湿地帯がどこまでも広がる未開の地だったのです。

1600 年関ヶ原の戦いに勝利すると、家康は先ず江戸を全国の政治・経済・文化の中心地にするための本格的都市計画事業「天下普請」に取り掛かります。全国の大名に諸工事「御手伝普」を賦課し、おもに西日本の大名に対しては、千石夫といって所領千石につき人夫 10 人の労役供出を課しました。そして神田山を掘り崩し砂洲や干潟等の低湿地を埋め立てて、広大な市街地を造成したのです。また城郭拡充用の水路を東に延長して日本橋川を開き、日本橋を架けました。そしてここを五街道の起点としました。町人は下町に、武士は山手、神社は周辺に移転という大まかな棲み分けも出来、1640 年頃までに江戸は天下の城下町としての初期整備を終えました。

江戸は堅固な江戸城のもと、最初は軍事優先的な都市の性格を持っていましたが、1657 年の「明暦の大火」がきっかけとなって防災都市へと、構造的な転換を遂げたのです。この 2 日間にわたる大火で江戸

の街の約 7 割が焼失し、十万人以上もの犠牲者が出ました。そこで大火の教訓を生かし、江戸城周辺の武家屋敷や寺院の配置移動、市内各所に火災の延焼防止のための広小路,火除明地,火除堤などを設け、道路の拡張整備、隅田川への両国橋(全長 171m)架橋など、整備は思い切ったものでした。

2　江戸の人口

徳川吉宗による日本で初めての全国的な人口調査 1721 年(享保 6)で、江戸の人口は 501,394 人、これは町奉行の管轄のため、武家や寺社人、出稼人の数は含みません。武家約 50 万人、寺社その他約 10 万人を町方約 50 万人に加えてみますと、合計約 110 万人になります。当時ヨーロッパ第一の都市ロンドンの人口が約 70 万人、パリが約 50 万人、ウィーンが約 25 万人ですから、江戸は世界最大の都市だったと言えましょう。ただ、江戸は圧倒的に男性が多かったのです。享保 6 年の人口調査では、町方だけで、男性約 32 万 3 千人に対し、女性は約 17 万 8 千人でした。つまり男女比はほぼ 2 対 1。これは、当初諸国から職を求めて江戸に流入してきたのはほとんどが男性、また参勤交代でたくさんの武士が単身赴任してきたのが理由と言われています。江戸後期にはこの男女比は解消しました。

3　江戸っ子

江戸っ子は、一般的に「物事にこだわらず、金ばなれがよく、意地と張りとを本領とし、正義感は強いが、反面けんかっ早くて軽率」とされています。戯作者である山東京伝(紛らわしい名前です)の天明 7 年(1787)の洒落本「通言総籬」(つうげんそうまがき)は、新吉原の遊郭で通(つう)の世界を事細かく述べたベストセラーです。「通言」とは廓(くるわ)言葉、籬とは遊女屋の格子戸のことですが、高級品が大好きな京伝はここで本領を発揮して江戸っ子を江戸高級ブランド （強いて言えばスノッブ） に飾り立てて定義しています。このころ洒落本と時を同じくしてウィットに富んだ川柳も生まれました。

排風柳樽(川柳集)
＊ 江戸者の　うまれそこない　金を貯め
＊ 江戸っ子は　五月の鯉の　ふきながし

江戸っ子については、別号で扱う予定の「競い合う文化」の中でまたお話しいたしましょう。

江戸時代の火消し
@江戸ガイド edo-g.com

火事と喧嘩は江戸の華

前回は都市としての江戸が明暦の大火(1657)を経て軍事都市から防災都市へと変貌したことを書きました。今回は「火事と喧嘩は江戸の華」と言われていた江戸の防火を見てみましょう。

1　江戸の火事

1601（関ヶ原の戦いの翌年)ー1867（大政奉還）の 267 年間に、江戸では 46 件の大火が起きています。同期間に京都では 9 件、大阪は 6 件そして金沢では 3 件の記録があり、確かに江戸の火事数は桁違いです。おまけに普通の火事も 1792 件にも及んでいるのですから、火事の都としては断然トップと言えましょう。

統計的に江戸の大火事はほとんどが空気の乾燥している冬(1-3 月)， 北西の季節風に煽られて起きています。江戸の街の庶民の建物は火事を見越して安価に作られ ひしめき合っていて燃えやすく、壊しやすく（！）住人も単身男性が多く、関西の商家の人々の用心深い防火意識には遠く及びませんでした。庶民もそれなりの自衛策を考えていました。例えばこの時期には火事を恐れて婦女子を江戸の外に疎開させる、裕福な商家は店が全焼してもなるべく早く営業再開できるように 店一軒分の木材を材木屋に預けておく、土蔵よりは安価な穴蔵を備える等々です。

次々と火事に見舞われ、状況を憂慮した幕府は、法書火消(1629) 大名火消（1643）定火消（じょうびけし 1658）などの火消を創設して火災に対処しましたが、町方の者は恩恵を受けられず、かなり後になってから町火消しが編成されました。

全てが華美な江戸のこと、大名火消は火事が起こると、華麗な火事装束に身を包み隊列を組んで現場まで行進して消火活動に当りました。大名自らが火事場に登場することもあり、装束もどんどん派手になって、消火活動中に装束の着替えを３度も行なう大名まであらわれたそうです！

2　破壊消火

驚いたことに当時の消火活動は、破壊消火というものでした。火元の風下（かざしも）２町とその両脇２町の計６町を、火が移らぬように破壊し除去してゆくのです。火消人足は、定火消の配下の臥煙（がえん)、町火消の中核をなした鳶人足（とびにんそく　鳶職）などです。ちなみに 臥煙は必ず江戸っ子でなければ採用されず、ヘアスタイルは奴銀杏（やっこいちょう）という、粋な結い方。出動の時には、白足袋に真新しい六尺の締め込みをつけ、肌には いなせな彫り物（いれずみ）半纏一枚で飛び出します。軽技師のような身のこなしで火事場を跳梁し、人気もありましたが、組織ごとの対抗心や気性の荒さから喧嘩が耐えませんでした。

3　いろは 48 組

江戸南町奉行の大岡越前守は享保 5 年(1720)、 町民の 店火消し(たなびけし 1718)にヒントを得、48 の「イロハ」の記号を付けた、江戸の町火消「いろは 48 組」を編成しました。各組の象徴は個性的な纏（まとい）です。いざ火事になると火の見櫓（やぐら）の半鐘が鳴ります。消火隊は纏持ちを先頭に火事場に駆けつけ、火元を探して組の名前を書いた消札（けしふだ）を近くの軒先に掛け、纏持ちは一番火の粉が降りかかる風下の屋根に上がり長さ約２メートル、重さ 22 キロの纏を振り立て、房のような 48 枚の馬簾（ばれん）で火の粉を避けつつ 組の消火活動（破壊）の鼓舞を行いました。竜吐水（りゅうどすい）というポンプは火元よりも仲間に水を掛け火から守るのに役立ちました。火事現場では火消し札をめぐっての争いも多く、肝心の消火活動をせずに喧嘩をはじめることもしばしばでした。幕府は火事場での喧嘩を禁じましたが、江戸時代初期には武家火消同士で、町火消誕生後は武家火消と町火消で、武家火消が衰退すると町火消同士で、といった具合に功名争いは絶えず、喧嘩がなくなることはありませんでした。大名火消は幕府の管轄でしたが、町火消しは町が費用を負担しました。雀の涙ほどの見入りでも派手に命を張るあたり、やはり江戸っ子らしい生き様と言えるでしょうか。

豊原国周　1874 年「東京一二伊達鏡」『市川團十郎』
【みんなの知識 ちょっと便利帳】豊原国周・東京一二伊達競より

四番 市川団十郎

開かれた男

石山望

私は、基本的に人を信用する人間である。
そんな手合いは、もちろん、昨今、インターネット詐欺師恰好の餌食。この詐欺師たち、頭は非常に良く切れる。ただ、顔は絶対に見せない。そして、何より性格が悪い。多くの善良な市民の金を、うまく言って掠め取る。そんなことで「生計」を立てていて、気持ちがいいのであろうか。税金を一銭も払わない人生、。もし、彼らに子供がいるとしたら、子供の顔をまともに見られないのではないか。まあ、これらの詐欺師たち、その様な正常感覚は持ち合わせないということか、。

1960 年代の英国で、列車大強盗事件と言う有名な事件があったのを思い出す。ロンドンからグラスゴーに向かう途中の現金輸送列車が 10 数人のギャングに襲われ、莫大な金額の古札が盗まれた事件である。
今時の詐欺師は、その現代版と言うわけであるが、うんとスマート。ただ、こんな物騒な世の中になってしまったのは噴飯物、なんとも嘆かわしい。何しろ、人をおいそれとは信用できないときている。知らない人でも、簡単に家の中に入れてしまう様なお人好しの私であるが、77 年 11 ヶ月の今まで、そのために被害を被ったことはない（例外的に、一度だけ、ちょっとした金額を掠めとられたことがあったが、すぐに全額戻ってきた）。それどころか、その「人を信用する」と言う性質に生まれついたことを嬉しくさえ思う。「人の懐に飛び込む」と言うのか。この性格のために失ったものより、得たものの方がはるかに大きい。変える気は毛頭はない。これからも、あくまで、「開けた」人間で行く。まあ、私のこの歳では、変りようもないけれど、。

私のこういう性格のおかげで、随分、良い友達にも恵まれた。日本でも英国でも。
もし、私が、もっと注意深く、また「閉ざされた」人間であったとすれば、今の様なゆったりとした生活は望むべくもないのではなかろうか。いい友人も多いし、。

昔、日本にいた頃、電車で、たまたま私の横に座られた人と親交を結んだことを思い出す。謡の先生。
今では、まあ、さすがにそれはない。インターネットが盛んになってせいぜい 20 年。世の中、非常に便利になったが、その反面、極めて物騒にもなってしまった。ああ、ヤダヤダ、。今度、詐欺師から電話がかかってきたら、「一度どこかでお茶でも？」と誘ってみましょうか。恥ずかし屋で、人前に出るのを極度に嫌われる人たちだから、電話を切ってしまわれるだろうなあ、きっと、。

若者よ、君、死に給うことなかれ

日本のお知り合いの方から、こんなことを耳にした。日本人。彼のお孫さんは高校生。そのお孫さんの学校での友人が、なんでも自殺されたとのこと。私、それを聞いて、唖然とした。ああ、なんと勿体ない、。
この若者に限らず、人間誰しも、「ああ、死んでしまいたい」と思う時はあるものである。私にも、あった。ただ、この「死んでしまいたい」は、厳密に言えば、「生きていたくない」ということである。それも、ある特定の時期に限り、。この残念なことをしてしまった高校生の場合も、学校で、誰かと折り合いが悪く、それを悔やんでのことらしいが、そんなこと、誰にでもありますよ。その時、その「誰か」の顔を見るのも嫌だというのならば、極端な話、しばらく休学、または退学したらどうなの？ 何も死ぬことなどない。そうすると、一年遅れることになるが、そんなの別に、、。その間にいつか道は拓けてきますよ。
私の思うところ、若い人というのは、だいたい、「死ぬ」というのがどういうことか、分っていない。
それで、一時の窮状から逃れられると思っているのかもしれないが、果たして、そうであろうか。

人間、死んでしまえば、いいことも悪いことも、わからなくなってしまうではないか。また、この高校生など、自分が死ぬことによって、誰かに「思い知らせてやろう」というところがあると思うが、自分が死んでしまえば、それすら見届けることができない。そんなのでいいの？

君たち、そんなに遠くない将来、どんなにいいことが待っているかもしれない。素晴らしい人に出会う、、男性？または女性？、。何かの資格を身につける、。そうすると、自分の世界が大きく広がる、。ただこういうの、君たちが、努力するとしての話。何もしなかったら何にも出てこない。そして、これらすべてのことは、もちろん君たちが生きていて初めてできること。そんな時に死んでしまって、どうするの？

およそ、我々の人生、何十年か生きて、その当然の帰結として「死」というものがあるんだろう？それを、ちょっと生きたくらいで死んでいくって、どう見てもおかしい。そうは思わないかい？
人生って、いいものだよう。実に素晴らしい。
ただ、いろんなところで、少し辛いからって、くじけていてはダメだけどな、。
君たちにだって、友達ってあるだろう？それらの人に助けを求めても、いい。
とにかく、生き抜いて欲しい、。切に言う。声高に言う。ああ、若者よ。君、死に給うことなかれ!!
最後に――
私、こういう場合に、いつも思うことがある。この高校生、自分がそんなに悩んでいるのであれば、その悩みを打ち明けられる方が、どなたかおられなかったのか。親兄弟始め身内がダメなら、学校の先生？、。まあ、クラスメートには言いにくいだろうな。

私、20 代後半、まだ日本にいた。いろんなことが重なって、失敗続き。人様の信用を完全に失って、酒ばかり食らっていた。四面楚歌とはまさにこのこと。その時欲しかったのは、自分の悩みを洗いざらい打ち明けられる人であった。「何かあるのと違うのん？」だけど、誰もおられなかった。
それで、日本を出た。

こんな女に誰がした

「あの、、おじさん、ちょっといいですか」
「、、、？？？」
「私、実は今夜泊まるところがないんです。お金もありません、、、。」
昨年の 11 月に帰国していた時のこと。まだ、夜というには早すぎた。夕暮れ時。京都は祇園の近く、建仁寺に行く道。私とすれ違った彼女、すぐさま引き返し、私にこういったのである。

年の頃は、30 代半ばか。美人でも不美人でもない。私、「このお寺に行って、相談したらどうですか。」と言って、追い払った。

また、これも、このころの京都での話。まだ、陽は高い。私、四条河原町、高島屋の前にあった冷たい石のベンチに座っていた。そこいらで、人と待ち合わせ。すると、またまた妙齢の女性。晩秋だというのに、ぺらぺらのミニスカートは、なんとも場違いだと映った。そして、彼女、なんと私にウインクを仕掛けてきたのである。私、呆れて物が言えなかった。

昔、私が日本に住んでいた時にも、こんな女性はいたのであろうか。まあ、その時は、私が若く、どんな女性も（お金目当てで）私に寄ってくるということはなかったということか。急に、変なことを思い出した。「何が彼女をさうさせたか」昭和２年，藤森成吉の戯曲。そして、「こんな女に誰がした、」。昭和 22 年、菊池章子「星の流れに」の一節。これら二人の女性の言動は何を意味するのか、。一体今の日本は、どういうことになっているのであろうか。

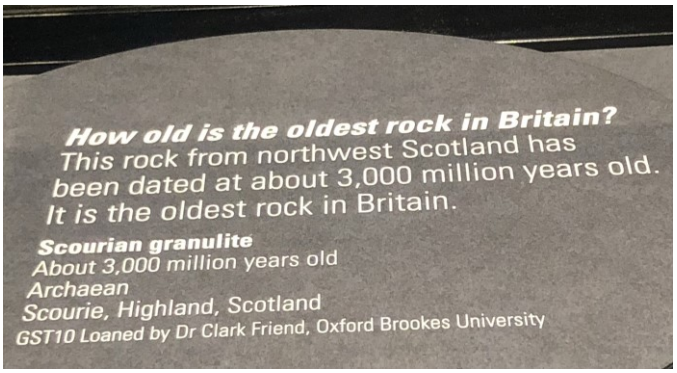
総体的に言って、私が、この前に帰国した時（4 年ほど前）より、日本人の経済状態は、悪くなっているということか。私、先回の帰国で、いとこの家に「お邪魔してもよろしいか」と言って、本当に「お邪魔」した。しかし、その時、実際はいけないことをしたのでは？と感じた。
次回（おそらく今年）は、私が、どこかへ、ご招待しようと思っている。

地球の歴史を知るには

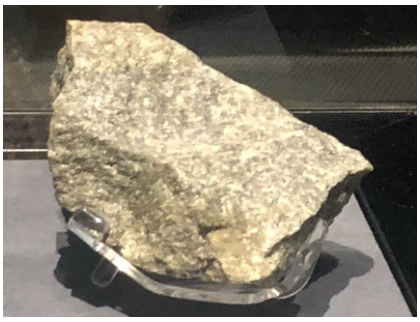
須永静江

1 岩石と鉱物(ミネラル) から

地球形成初期の、今から 46 億年～40 億年前の時代は、地質年代では冥王代 (Hadean Eon ヘイディアン) と呼ばれ、大き目な微惑星同士が衝突し合い、大量の熱エネルギーを宇宙に発散する中、より大きな引力を持つ微惑星が他の微惑星を統合して、次第に大きな惑星を作って行きました。地球は、まだ熱いドロドロの溶岩 (molten)で、地表が冷えて固まるまで、約 8 億年が掛かったと言われています。



従って、冥王代の岩石は、地球上に存在しません。地球の表面が固まるまでの 8 億年の地球の歴史を調べる材料は地球上には存在しませんから、科学者は月や火星、地球に落ちてくる隕石などを材料にして調べています。



冥王代に次ぐ、今から 40 億年～25 億年前は太古代 (Archean Eon アーケイアン)と呼ばれます。この時期になると、38 億年前の地球最古の岩石が Greenland のイスア (Isua) で見つかったニュースとか、カナダの Hudson Bay では、それよりも古い岩石が見つかったと言うニュースが話題になります。岩石の中に含まれている zircon などを放射法測定などにかけると、その岩石の年代が分かるからです。

左は、約 30 億年前の Archean Eon 時代の岩石で、ブリテン島で一番古いものです。

地球が冷えて地殻が出来ると、海・大気層などが出来て、プレイト・テクトニックスや生命の誕生などが話題になります。

海洋地殻が出来て海ができ、地球内部のマグマの力でテクトニック・プレイトが動き出すと、海洋地殻が割れ、そこから山や島が生まれ、大陸地殻が発達したと思われます。地殻はまだ薄く、プレイトの衝突で起こる沈み込みなども浅かったかも知れません。それでも、地殻は壊され、地球内のマグマの中に落ちて行き、マグマの中で溶かされ 、再び 溶岩 (molten) となって、押し上げられ、噴き上げられて新しい地殻を作り出す、地球はこの繰り返しを 40 億年近く続けて来たと思われます。そして、これからも、地球内にマグマを動かすエネルギーがある限り、地殻を作ったり壊したりを繰り返して行くことでしょう。

地球上に早期にできた超大陸として、Vaalbara 、Ur、Kenorland、Columbia などが挙げられていますが、それらは、プレイト・テクトニックスの運動に影響されずに、何十億年もの間生き続けて来た Craton（クラトン）を元にして考え出された大陸です。Craton は安定した地殻を持っており、大陸の内部にあるので、テクトニック・プレイトの境界線で起こる、衝突や沈み込みなどのマグマの活動に影響される事がありませんでした。Craton は、現在でも、地球の 6 大陸のあちらこちらに散在しており、6 大陸は Craton を基にして出来たと言われています。Vaalbara 大陸は 36 億年前に、Ur は 30 億

年前、Kenorland は 27 億年前、Columbia は 25 億～15 億年前に超大陸として存在して居たと言う説がありますが、仮説に基づいているせいか、余り議論の対象になっていないようです。

しかし、Rodinia（ ローディニア ）と言う大陸になると、時代が下りて現代をも含む顕生代（ Phanerozoic Eon ）とも関連付けられるせいか、存在が身近に感じられます。Rodinia は、10 億年以上前に形成されましたが、その分裂の時期（ 7 億年前前後 ）が 地球が ‘Snowball Earth’ と呼ばれる極寒に襲われた時期であったのと、その後に、突如（ 地質年代的にですが ）、夥（ おびただ ）しく多様性に富んだ生物が誕生する ‘Cambrian Explosion’ の時期につながるので、それらとの関連性が指摘されている超大陸です。

総じて、原生代（ Proterozoic Eon ）の終わり頃（ 今から約 6 億年くらい前 ）に、化石になって残るような原始的な動物が出て来るまでは、地球の歴史は岩石や岩石に含まれるミネラルを元にして調べられて来ました。

2 化石から

地球に生物が現れると、それが、動物にせよ植物にせよ、地層の中に化石となって残る可能性が出来、その化石から、地球のいつの時代の生き物か、その時代の地球はどんな状態であったのか、その生き物は、どのように進化・退化して行ったのか、など、さまざまな関連性が出て来て興味が増します。

化石と言うと、三葉虫（ trilobite ）や アンモナイト（ ammonite ）が有名ですが、私はこれから、昨年イギリスで話題になった「 海ゆり 」と「魚竜」の化石について話したいと思います。

「海ゆり」は、英語で sea lilies と呼ばれますが、chrinoids の一種です。crinoids や echinoderm で検索すると、更に、似たような、さまざまな動物を知ることが出来ます。「海ゆり」と呼ばれるのは、形・姿が陸の植物のゆりに似ているからですが、実際は、海底に棲む動物です。海底に根をはって、流れ来る海水を取り込み、プランクトンや動植物の死骸など、小さな有機物を濾して食べます。植物のように、生きるために、太陽の光や空気を必要としません。

「海ゆり」の歴史は古く、今から 4 億 8 千万年前の Ordovician（ オードヴィシャン ）と言う時代から棲んでいました。その最盛期は 3 億年前（ 石炭紀 ）頃で、海底は「海ゆりの森」（forests of crinoids）で覆われていました。何千種も居た crinoids も、ペルム紀末（ 2 億 5 千万年前 ）の大量絶滅（ Great Dying ）時にほとんどが死滅してしまいましたが、生き残った僅か 1～2 種類の crinoids が、その後勢いを盛り返し、今に至っています。
昨年（ 2022 年）の夏、イギリスの西南部 Wiltshire（ ウィルツシャー ）で crinoids の化石の発掘が行われました。「海ゆり」や feather stars と呼ばれる泳ぐタイプの物など、それらがまとまってゴッソリ出て来たようです。化石の年代を調べると Middle Jurassic（中期ジュラ紀）Bathonian（1 億 6 千 7 百万年前)だそうです。

Middle Jurassic 時代の Britain 島は地球のどの位置にあったのでしょう？　地図を見ましょう。

左側に、北アメリカを中心とした、カナダや Greenland を含む Laurentia 大陸と、右側に、ノルウェー・スウェーデン・フィンランドなどの北欧諸国のある Fennoscandia が見えます。（ もっとも、この時代の Fennonscandia は現在のようなスカンジナビア半島ではなく、ポーランド・ウクライナ、更には、ウラル山脈までの西部ロシアを含むバルティカ（ Baltica ）と呼ばれる古い大陸の一部で、ユーラシア大陸の北西部にくっ付

いておりました。）これらの二つの大陸の間にある少し南の海に、大小多くの島や小大陸が点在しておりますが、Britain 島もその中にありました。この頃の地球は暖かく、万年雪や氷はどこにも存在しなかった時期でした。地球全体の海水のレベルが高く、イギリスの大半が海に沈み、西ヨーロッパの国々、フランス・ドイツ・デンマークなども海底に在ったようです。

上は、Wiltshire の「海ゆり」の化石と、化石の「海ゆり」が生きていた頃の、海底の想像写真です

また、「 魚竜 」は聞きなれない名前ですが、英語では、ichthyosaurs 、または、sea dragons と呼ばれます。同じように、昨年（ 2022 年 ）、イギリスで大きな話題になりました。East Midlands の Rutland と言う所の自然保護地区の湖で、島の景色を造り替えようと水を干した所、予期もせぬ巨大な化石が現れて出たのだそうです。発掘が進むにつれて、それは、これまでにイギリスで見つかった「魚竜」としては一番完璧な化石で、しかも、10 メートルにも及ぶ最大の物だと言うことが分かりました。この「魚竜」の化石も、Middle Jurassic 時代の物だと言うことですから、この大きな「 魚竜 」も、先の「 海ゆり 」と同じ地図上に見る海に生存していたと思われます。もっとも、「魚竜」の食べ物は魚や烏賊（ いか ）のようなものだったそうですから、「海ゆり」は食べなかったと思います。以下の写真が Rutland で見つかった 「 魚竜 」の化石で、右側の写真から、身長 2 m くらいの人の約５倍の大きさであるのが分かります。

後 記 ： Middle Jurassic の時代に Britain 島が上記の地図に見るような地球上の位置に在ったのであれば、現在の Britain 島はどのようにして現在の位置に移動したのでしょう？プレイト・テクトニックスの考えに関連付けて解き明かして行くしか道がないようです。ひとこと言えることは、現在とこれらの化石年代との間に、1 億 6700 万年もの差があると言うことです。

本の声が聞こえますか

園部健治

本が売れなくなったといわれて久しい。また、本を読まなくなったともよく聞くが、電子書籍を読んでいる人は一定数いるであろうから、この場合の本とは紙の本を指す。それでも、本を読むよりネット（スマホ）を“見ている”時間の方が圧倒的に長くなっていることに疑いを挟む人は少ないであろう。

この寄稿は、そんな時代に逆らうかのように、紙の本に愛着を感じ続けている一日本人の思いを綴ったものである。単に時代遅れのぼやきと言えなくもないが...。

年末年始にかけて一時帰国したが、日本出発当日である正月七日、八重洲ブックセンターが本年３月に現在の場所での営業を終了することを何故か思い出し、急い

で足を運んだ。気になる本があれば買おうと思っていたものの、限られた時間で巨大な本屋で当てもなく本を探すのは容易なことではない。立ち読みするだけでも良いかと思ったものの、学生の頃から通算すれば、かれこれ４０年近くになるこの本屋に立ち寄るのもこれが最後かと思い直し、やはり何か買い求めておきたいと心に決め、東京駅八重洲口に降り立った。

記憶を辿れば、一時は日本最大の蔵書量といわれたこの本屋で最後に買い求めてから二十数年は経ち、その後、一冊も買っていなかったのだが、不思議なことに何故か買った本は覚えていた。同じ著者のものをと思い立ち、結果的には、同じ著書の本を買い求めた。その本は行きつけの丸善では何度も手に取り、買おうか買うまいか迷った本であったが、今回は何の迷いもなく買い求めた。理由はただ一つ、“自分を選んでくれ”との本の声がその時に聞こえたからである。（この場所で買う最後の本だからという感傷的なものが少なからずあったことは否定しないが...。）

衝動買いと言えば衝動買いであるが、自分としては衝動買いとは異なると思っている。毎日同じ本屋を訪れても、目につく本は毎日異なる。目当ての本を探しに行って、実際に手に取ってみると、どうも自分が思っていた本とは異なり、結局、買わず仕舞い。ところが、その隣にあって、昨日まで全く気にも止めなかった本が何故か目にとまり、買ってしまうのだが、その場合は買っても後悔しないことが殆どである。こうした経験がこれまで何回もあったが、共通しているのは、その時に、“自分を選んでくれ”との声が不思議と聞こえるのである。

そんな声は、大きな本屋に限らず、今では見かけることすらなくなり、希少価値ともいえる街の小さな本屋でも聞こえた。何気なしに立ち寄った昨年の英赴任直前に宿泊していたホテル近くの小さな本屋で本を買い求めたのも、そんな声が聞こえたからである。

こうした本の声を聞きに行くことを楽しみに感じて本屋に立ち寄るようになったのはここ１４、５年くらい。単なる立ち読みとは異なるとの妙な自負があり、オンラインで本を買うのでは到底味わえない贅沢なひとときであると思っている。

そして、これは日本ばかりでなく、ロンドンでも同じである。Waterstones の会員になっているので、毎日、新刊本、プロモーションの案内がメールで送られてくる（『Spare』もあったが、そもそも読んでみたいとすら思わなかった）。また、新聞書評欄で取り上げられる本の内、読んでみたい本を選んでおく。ところが、実際に Waterstones(Piccadilly)に足を運んでも、これが読みたいと思っていた本かと大いに悩むことになる。この本を買うのは止めようと決め、他のジャンルのコーナーに足を運んだところ目に止まった本があり、迷わず買い求めたりもしている。本の声には言葉の問題は関係ないようだ。異なるのは背表紙が縦書きか横書きかの違いであり、洋書の場合は首を９０度曲げることになることか...。

そうした中、今、英語の本で読みたい本が１冊ある。その本は父が自分と同じ年齢（還暦）の時に翻訳

本で読んでいた英作家によるもので、これも一昨年２月の福島県沖地震で家中に飛び散った父の蔵書を整理していた中、偶々目にとまった一冊で、英国に赴任することになり持ってきたものである。オンラインで入手できることは分かっているが、これは何としても本屋で見つけたいと思っているし、探し当てなければならない。残念ながら、Waterstones, Dillons, Hatchards の大手本屋にはなく、近所の古本屋でも見つけられなかった。

でも、幸いなことにロンドンには古本屋が数多あり、これからは古本屋巡りをして探すつもりである。あとどれくらい英国に在勤できるか分からないが、何とか在勤中に見つけたいと思っている。間に合わなければオンラインで買い求めるか。いや、それでは、既にこれほど大きな声で自分を呼んでいるその本に失礼ではないか。その声を探し当てるのが、今回の英国在勤の一大事だと思っている。その本は“The Private Paper of Henry Ryecroft”という。

恋はやさし野辺の花よ～そして今

正木裕子

恋はやさし野辺の花よ、は、浅草オペラで人気を博した往年のテノール田谷力三氏（1899-1988）の名演で知られているアリアである。浅草オペラは和製のオペラと言われるが、その由来はなんだろうか。また大正時代にヨーロッパ発祥の舞台芸術がどのように日本で親しまれることに至ったのか、その謎を探ってみた。

私は上野の東京文化会館でオペラ公演を観た際、幕間に、田谷力三氏を会場のロビーで偶然お見かけしたことがある。もう、随分と昔の話だが、祖父と同年の明治生まれなので、当時既に８０歳を超えておられたはずである。氏は、あたかも舞台やテレビに出演中であるかのごとく、ストライプの背広をシャキッと着こなしておられ、人目を引いていた。姿勢の良さが今でも印象に残っている。

さて、このアリアは、オーストリアの作曲家スッペのオペレッタ、ボッカチオの中に登場する。浅草オペラは、詩人で翻訳家の小林愛雄（こばやしあいゆう）（1881-1945）の翻訳により、日本語で上演された。当時、帝国劇場で上演されていたオペラに比べると、浅草オペラは、料金も手頃で、お話も聴衆にわかりやすい言葉で上演された。それが、気難しくなく大衆に親しみをもたらした人気の要因であった。

私の手持ちの日本歌曲の楽譜集に次のような記載がある。「田谷力三は、大正６年、19 歳でフランスの作曲家ブランケットによるオペレッタ、コルネビーユの鐘の主役に抜擢された。また、彼のヒット曲には、アイヒベルグのオペレッタ、アルカンタラの医者のアリア、恋のために、オーベール作曲オペラコミーク、フラ・デイアボロのアリア、岩にもたれた、オッフェンバッハ作曲オペレッタ、ジェロルシュタイン女公殿下のアリア、大勝利の歌、等がある」※注１

これらの作品について、もし、全てご存知の方がおられたら、かなりのオペレッタ通に違いない。現在ではかなり上演回数が少ないものも多い。以前から、私は、なぜこのような、あまり一般的に知られていないドイツ語やフランス語を原語とする作品の数々が日本で人気を博していたのか、その由来を大変不思議に思っていた。しかし、理由を探ってみると、あることに気がついた。どうやら、ほとんどすべて、それらの台本や歌詞は英語であったらしいのだ。

オーベールとアイヒベルクの作品はニューヨークのブロードウェイ、オリンピックシアターで 1867 年に Caroline Richings Opera Company によって上演が行われていた。つまり、英語訳されていた。

明治 33 年(1900)、ロンドンで、興行師　Maurice　Bandmann(1822-1922)は、Gaiety Theatre in the

Strand と呼ばれたミュージックホールのメンバーを中心にして Bandmann Opera Company を結成した。そしてインドのカルカッタに旅興行の本拠地を置き、オーケストラも入れて総勢６０名余りでエジプトから、極東へ至る各地において海外公演を行った。その名もバンドマン喜歌劇団と称されて、日本への公演旅行は横浜、神戸、東京において、1906 年から 1921 年に渡って１２年間にも及んだ。

当時の英国人たちの発想のスケールの大きさには本当に驚く。なんと、バンドマンは、インドのボンベイにオペラ劇場の建設を 1908 年に提案し、3 年後にそれが実現されているのだ。現在のムンバイオペラ劇場となっている。それにも増して、数週間にわたる船旅で移動したのであろう、楽団や歌手達は相当強靭な体力と精神力を持って移動公演をこなしていたに違いない、と感心する。

そのようにして英国のアーチストたちが日本に訪れていたのである。演出資料や楽譜が簡単に手に入らなかった当時、英国の歌劇団が浅草オペラの歌い手たちに多くの刺激をもたらしたであろうことは容易に想像できる。　ここにも、大英帝国の歴史の一端がありありと感じられる。

※注２、A,B

つまり、日本のオペラの黎明期には、上演作品を選択するにあたって、英語圏のショービジネス界ですでに成功していた作品を参考にして、それらを積極的に取り入れていたということではないだろうか。さらに、台本の進行も、当時の日本の風習や道徳観に沿った内容へと改定されていた。浅草オペラは、それゆえに和製のオペラと呼ばれて、娯楽として、大いに支持を得たのだ。では、和製の要素、とは、具体的には、どのような点であろうか。残念なことに、当時はヴィデオもない時代であるので、浅草オペラの公演記録を現在見ることは叶わない。しかし、それと似たような例で、和製の洋楽といえば、第二次世界大戦後のシャンソン、も同様であろう。その例を二曲挙げる。

まず、日本人の好みに沿って和風な要素を取り入れた楽曲の一例として、Le Petit Cordonnier をとりあげる。明らかにシャンソンのカバー曲なのであるが、訳詞や編曲は複数の国を経由するに連れて、どんどん変化していることがわかる。これは、日本の題名、町の小さな靴屋さん、という粋な調子の良い曲である。

フランスで 1953 年にフランシス・マルクがギターを弾きながら歌った。歌詞の内容は、「靴職人が思いをこめて憧れの彼女に無料で靴をプレゼントする。一緒に踊りに行く、という条件付きで。彼女は一旦同意するが、いざ、踊ろうとするとき、靴職人を馬鹿にして一緒に踊ることを断る。すると、魔法にかかったこの靴を履いた彼女は、くるくると周りだして、朝になっても、踊る事を止めることができない。彼女は、靴職人を馬鹿にしたことを彼に謝る。そして最後は、二人で人生の舞踏会へと出発する。」という内容である

それが、アメリカに渡った。1954 年に The Little Shoemaker として、男性三人組ヴォーカルの The Gaylords がイタリア語と英語の二カ国語の曲として発表し、大ヒット。ラテン系の言葉の持つ明るさと靴屋さんの槌音を真似たパーカッションも加わって陽気な編曲に仕上がっている。同年に、英国では Petula Clark が歌った英訳曲が人気を得ている。

英語の歌詞では、「とても忙しい靴屋さんを訪れた女性が、よく踊れる靴を注文する。靴職人は魔法の指を持っていて、靴を１針ずつ丁寧に縫う。そして、彼女が自分のことを愛してくれることを願う。彼女は靴を履くと、とてもよく踊り、クルクルと回りながら、店を出て向こうの通りへ去っていく。」といった内容へ変化を遂げている。フランス語の歌詞にある靴職人と女性の駆け引きは感じられない。

のちに、日本ではペギー葉山がこの曲を紹介した。一番を流暢な英語で、二番は日本語に翻訳した歌詞で、リズミカルな彼女の歌唱は心地よい。

更に極め付けは、キングレコードのディレクター音羽たかしの翻訳による、双子の歌手、ザ・ピーナツの録音である。もとより彼女たちは、各国の流行歌をカバーしたことで知られている。日本語の歌詞では、サビの部分が、「私によく似合う、羽のように軽い靴をくださいな」というリフレインになっている。靴職人とお客さんのありふれた会話という趣向であって、職人さんの淡い恋心は、控えめに表現されていて、かなり、原曲とは趣向が異なる。ザ・ピーナツの独特で日本的なねっとりとしたポルタメントの歌い回しと、当時日本で流行していたと思われるラテン系のリズムの編曲が加味されている。このように、いわば和製化したシャンソンとなった。これはこれで、たとえ原曲とは別物であっても、十分味のある演奏として仕上がっている。

これらのオペレッタやシャンソンを通して見えてきたことは、ドイツ語やフランス語の楽曲が原語の

まま、日本へ伝わってきたのではなく、一旦、英語に翻訳されたのちに日本に渡来したという点である。いわば、英語で一旦噛み砕かれた歌詞が存在していたのである。そして、小林愛雄や音羽たかしなど、当時、最先端で活躍していた音楽の目利きたち（耳利きというべきであろうか。）が、英語から日本の聴衆向けに翻訳したというわけである。現在表立って語られることは少ないが、彼らが洋楽を日本に紹介した功績は非常に大きいと言える。原曲を日本語でカバーすることによって、見事に和製の数々の歌曲が誕生していたのである。

二曲目の和製洋楽の例として、シャンソンを児童教材に取り入れた曲を紹介する。私が舞台で生まれて初めて演奏したのは、某音楽教室の発表会であった。曲の内容は、今でも忘れない、「かわはよんでいる」、と言う、器楽合奏であった。子どもの教材だったので、敢えて、タイトルはひらがな表記であった。とにかく、発表会のために、懸命に三拍子、の練習をしたことを記憶している。この合奏で、年少であった私の担当は、カスタネット、であった。この幼児期の体験のお陰で、日本人には苦手、と言われる三拍子のリズムであっても、外すことなく、いつも指揮者に合わせて歌うことが出来る基礎を体得したと信じている。当時の幼児音楽教室教師であった、S.Y.先生に心から感謝するところである。これがフランスの流行歌であったとなど、全く知らなかったが、偶然、最近になって同名の映画L’Eau Vive 1958年の主題歌であることを知った。若き、ギー・ベアールが歌っていて、フランス語のテキストの内容は、何ともみずみずしい青春の恋愛歌である。(女優エマニュエル・ベアールは彼の娘。)ここで、私が驚いているのは、当時の日本で、例え、初心者向けの音楽教材であってもフランスで最新に流行している楽曲を敏感に取り入れていたことである。私と同様に、多くの日本の子どもたちの記憶の中に、かわはよんでいる、は、恋愛歌とは全く別の存在で、幼い日の懐かしい思い出の曲として存在しているに違いない。これも、外国から渡来した楽曲を和風にアレンジして見事に取り入れた例と言える。

何かを学ぶとき、とりあえず、真似をする、というのは常套手段である。もとより、日本人は、優れたものを見習う、真似をする、ということを音楽に限らず謙虚に行ってきた。その真似の仕方が余りにも優秀なので、結果的に本家から嫉妬を招いている場合もある。これは、ベルギーのさる工業部品メーカーのオーナーC さんとの会話から知り得ることができた、ヨーロッパ人の素直な感覚である。「あなたたち東洋の人たちは、もともとヨーロッパ人の私たちが発明した機械を精巧に真似して複製した。そして、現在では私たちが追いつけないような成功を収めている。だから、本当は心の中でずるいな、と、私たちは悔しく感じているのよ。」と。親しい関係であればこそ彼女は私に本音を語ってくれた。

明治時代以来、日本は欧米の諸国に遅れを取ってはいけない、と産業だけでなく文化の面でも必死になって真似を続けてきた。しかし、２１世紀に入った今ではどうだろう。そろそろ、日本の音楽文化も成熟期を迎えているのではないだろうか。
単に外国の有名歌劇場の海外公演を受け入れてオペラを鑑賞するだけでなく、そろそろ日本発信のオペラがあっても良い頃である。民話や伝説、歴史に基づいたオペラはすでに日本でも創作されて上演されている。
能を元に創作された細川俊夫作曲のオペラ「松風」は2011年にブリュッセルで初演され、2013年にはロンドンでも上演された。
全くもって微力ながら、私も、声楽の生徒さんには、必ず、日本の歌曲を紹介することにしている。それは、山田耕筰の「赤とんぼ」であったり、武満徹の映画音楽、であったり、今や大人気のアニメソング、であったりする。
近い将来、きっと、シューベルトやシューマンの歌曲のように、日本の歌曲も世界の舞台で歌われる日が訪れることを信じているところである。

注１、出典　長田暁二編ドレミ楽譜出版社日本抒情歌全集１、恋のために
注２、出典
A:The Globalization of theatre 1870-1930 the theatrical networks of Maurice Bandmann　Christopher B Balm Cambridge University Press October 2019
B:浅草いーとこ、特集、浅草オペラの時代 https://asakusa-e.com/tokushu/opera/opera_a.htm

『英国春秋』　2023 年春号　（ISSUE 42）
発行者　英国日本人会
編集者　小川のり子
原稿送付先　会報参照
タイトル　フリーまたは特集に寄せて
字数　Ａ４　1～３枚（ワード添付）
締切り　2023 年 9 月 10 日(原稿随時受付)